麻生路郎主宰

柳川雜誌

七月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和八年七月一日發行(毎月一回一日發行)　第十卷　第七號　柳川雜誌社發行

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過きてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

（路郎生）

古本は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南五六二番

加茂川句會

日時 七月十日(月)午後七時
會場 仲源寺(京都四條縄手東入)
兼題「休暇」三句 司郎選
會費 金參拾錢
京都市嵐山天龍寺前平岩方
京都支部

社告

本社の例會案内希望の方は左記へお知らせを願ひます
大阪市住吉區旭町三ノ一四
會報係 須崎豆秋

天王寺句會

(日時) 七月十日午後七時
(題) 「夏祭」三句
(所) 大阪天王寺區大道三丁目内藤製作所
幹事 松浦南面子

光笑會

(日時) 七月十六日夜
(所) カナメ喫茶店
(題) 「踊」三句
大阪市南區壁屋町六
幹事 永田里十九

▽川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち至します なるべく此用箋を御使用下さい
五〇枚綴二冊 價金拾二錢 (送料共)
▼御申込は本社事務所宛。
(一錢切手代用不苦)

懸賞川柳募集

題 「水平線」 路郎選
七月十日締切
その他雜吟を募る
▼用紙 宣製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六 麻生路郎氏宛

化粧新聞社

雜誌「藥業往來」川柳募集

題 「汗」 十句
七月二十日締切
用紙 ハガキ型
投句所 大阪市東區粉川町一六 生田翠夢宛
翠夢選

大正日日柳壇

(踏切番) 〃切 七月二日
(海水着) 同 七月九日
(子供) 同 七月十六日
(夕立) 同 七月廿三日
(團扇) 同 七月三十日
句數 五句(住所氏名、雅號明記の事)
用紙 ハガキ又は同型用紙
發表 「毎日曜」大正日日新聞
投句所 大阪市此花區上福島南三ノ六六松盛琴人方

川柳手拭の染筆

路郎主幹
一種 金三拾錢 (送料共)

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を强ひ
白鶴が縁とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘 嘉納合名會社釀

川柳雜誌第十卷第七號目次

近作柳樽……麻生路郎選…(四)
武玉川初篇研究(一四)……梅本秋の屋 森東魚 蛭子省二…(一〇)
再び川柳の飜譯に就て……笠原路生…(一六)
飛燕往來……(二六)
川柳塔……麻生路郎選…(二八)
粒々集……麻生路郎選…(二八)
句評陣……松山盛琴 西田丹路人 吉田水艸樂 福田山雨車樓…(三三)
自由律川柳を駁す……福田山雨樓…(一七)
日本名所川柳 大阪之卷「道頓堀」……(三八)
田にしの黑燒……蛭子省二…(四一)

もらつた批評……廣江天痴人…(四三)
地上地下……ヨシダスキシヤ…(四三)
夢を追ふもの……毛利九波…(四三)
寺小屋の幕より……姫田夕鐘…(四四)
雑記帳……松丘町二…(四五)
一路集
終點……關本雅幽選…(四七)
兄弟……朝田新水選…(四九)
土産物……福田鶴峰共選…(五一)
須崎豆秋選…(五一)
川柳家戸籍調……山雨樓…(四七)
西之町メモ……綠雨…(五〇)
肱枕艸紙(七)……梅本塵山…(五四)
各地柳壇……(五六)
編輯の窓……路郎…(七三)
表紙畫……(モット浮く浮袋を貸して下さい)……森田ひさし
表紙題字……麻生路郎

近作柳樽

路郎選

看護婦の濕布も春の憂鬱だ　　螢ケ池　松雨
回生の僕は五月の風に乘ろ　　同
愛慾の果は貞操料で揉め　　同

故郷を憶ひて

桑の實が熟す黑き吐息となる村や　　同
背なの子もしつかり摑む暗い道　　大阪　大門
空いたのを見せて急行素通りし　　同
病院の古顏同士行き違ひ　　同
叱られて朧月夜のかどに居る　　同　黑天子
ほうり出してから氣の弱い父になり　　同
合宿の空氣ゆうべは飲んだらし　　同
溜息はながし南京豆の皮　　神戸　幸損

出迎の妻に風呂敷受取られ　同

ラヂオ聞く留守番蒲團二枚しき　同

筒袖を着て恩人の老給ひ　大阪　いわを

堅氣にもなれず四十を越しちまひ　同

うちあけまつさと娘素直なり　櫻ケ池　巷巴

住めば都とやらに職がなし　同

うそつけば顔を見つめる兒の瞳　京都　富美三

自轉車で切る春の風春の風　同

萬といふ金なら借つてあげませう　大和　翠峯

許されぬ二人の上のお月さん　同

月給をきかれて自嘲するばかり　長野　柳兒

靴を脱ぐ時も新妻居て呉れる　同

麗人にとても淋しく笑はれる　大阪　勝二

風呂敷にこゝの暮しのしみがつき　同

夕立の氣配がしてる露天店　大阪　正甫

もの知りと言はれて金もよう貯めず　同

五六戸の家主へ今日も家があき　岡　菊路

元氣よく來た自動車へ車止　同　同

酒一升呑めば一升の不仕合せ　同　葉光

自動車待たせ燒香してるなり　東京　銀雪

妻の父ついでに寄つたやうに云ひ　同　同

停止線こぼれたやうに一人駈け　島根　孝作船

おもしろい人ですわねと酌いでくれ　同　同

櫻んぼむさぼり給ふ訪問着　大阪　青米

母親は椅子の高さへ寛げず　同　同

奥様の愚痴と獣醫は聞かされる　金澤　今雨

いゝ旦那見付け櫻もさかりなり　同　同

生活權男働くべく生れ　石川　草吉

ヨーヨーへ道ほがらかに乾きたり　同　同

子の寢息サンドウヰッチの匂ひする　大阪　道子

押入に罐詰のある共稼ぎ　同　同

水道のぬくさに海を憧憬れる

いつちいゝ着物で賣られ行く支度　今治　紫陽

公園のベンチの端へ待つでなく　同

親不孝者の上手なハーモニカ　入性　十七八

お互の肚を知つてゝ皆默り　同

物言はぬ客へ女給のコムパクト　香川　三汀

一番に來て辿り臺などすべり　同

退け時も近く銀行陽が當り　島取　法泉子

ネクタイを解いて櫻に疲れてる　同

死への瞬間までは稼ぎたいものだ　御賀　義風子

人間の價値を投票で定めらりよか　同

君歌を唄はうよ眞理が勝つんだよ　愛ケ池　愚寵

自殺を思ふ

屍のあがらぬ海ぞ戀しかる　同

風を引く事にもなれて病上り　不明　露洲

自らをあざむく如く死の心理　同

からだまぐればかまきりの影となり　愛ケ池　噴兒

硝子戸に農學博士老いてゐる　同　同　一馬

アマチュアへ思ひがけないアンコール　同　松江　同　莞路

ビスマルク苦り切つたる顔でよし　同　長野　同　有爲郎

失望の死んでも見たい夜が明け　同　高知　同　春水

家までも呑ました媚だあの媚だ　同　大阪　同　山茶花

棺桶が肩でゆれてるユーモア　同　同　同　青兒

自尊心を拾てた唇と唇　同　神戸　同　貞三

金借りに行けば疊を替へてゐる　同　同　同

秒針を見れば時計も忙しい　同　大阪　同　木圭

更けた街我が足音の他人めき　同　同　同

チュリップ今年は妻がありますよ　同　同　同

名刺まで返して今日はお留守です　同　同　同

塹壕で書いた手紙か支那の土　同　同　同

大掃除をとこをとことおだてられ　同　同　同

汽車の中叱つた妻を思ひ出し　同　同　同

非常時のえらいきらいなおかみさん　同　大阪　同　木圭

たまにもつ紙幣は財布に疲れたり　同　秋光

侮辱され汚辱されなほ生きてゐる　同　秋光

滿蒙に轉戰する友へ

討匪行颯々と鳴る君が靴　愛媛　蛙念

蠟燭の火も戀しけれ孤獨なり　同

濕つぽい春だよ胃散二つあけ　京都　竹雅

早熟ではないが周圍がさせた髭　同

覺えても所詮獨立出來ぬ藝　大阪　朴甫

ねくたいを置き忘れたる朝があり　同　銀波

俺と父頭の違ふ世に生きる　松江　祥月

一枝を折つて花見の春は暮れ　大阪　小舟

もういゝ時分斥候そつと顏を上げ　同　富士雄

休日を只寢るだけに世帶じみ　武庫川　遊歩

腰なはのさげすむ目をば背に感じ　大阪　四五磨

ヨーヨーにオールバックが亂れかけ　愛媛　狂波

みて貰ふ心になづた弱りやう

ガソリンの匂ひも嬉し初夏の街　松江　冬生

病床の花を知らさずかへてゐる　大阪寺　吉祥

ペン蛸は僕の給料知つてゐる　大阪　佐津美

甲上と云ふ日鞄が輕すぎる　同　はるを

諦めて嫁つた氣持に泣けて來る　神戸　巨鯨

禮塲では禮を他人に云はすなり　大阪　一杯

康夫をおもふ

自分の吐いた血の色を視てゐる　同　晴夫

ぼうふらに夏が來ました活潑さ　松江　みのる

もてもせぬ男は酒を呑むばかり　大阪　泊童

死んでまで父よそ樣の墓地に住み　神戸　棄郎

日中が賣時とあるいわし賣　東京　ひさし

口笛がやつぱり僕を呼んでゐる　桑江　榮吉

行く所迄行つたのだとなぐさまる　堺　曲豆

三夏越す夏帽冠ぶる社長さん　大阪　笛秀

子の癖を叱り貴方に似てゐます　同　迂均

相談は金の入ることばかりにて　同　一笑

水音もなく提灯が入れ亂れ　布施　操

兄弟の寫眞も入れて嫁ぐなり　高石　錦石

ふと寂し告知板でも讀みたい日　大阪　栞

トロツコで運ばれる土春を見せ　松江　砂詩朗

古顏になつて私憤を持つ給仕　大阪　元山

戀心仕事の間を見逃さず　小松　しとし

いゝ聲て語る門付隙見され　愛媛　世都象

泣いて居るとはサーカスの馬知らず　名古屋　月茶

工場風景

拍手する如くベルトの音がする　大阪　詩朗

お化粧が出來て女給は水を打ち　同　裸人

春の壁妻の僞心をそらすなり　同　新市街

腕まくりしたが乾兒の氣の弱さ　同　堅

ふきが威張つてゐるよ納屋のかげ　島根　六郎

皺の寄するまでも末の子行水し　大阪　良之佑

ポストにポトン手紙が響く朝　同　比左夫

人と馬疲れた顔に灯がともり　京都　香朝

公休はお客にもなる女店員　池田　萬雷

いたづらと子の健康の並びゆく　松江　天痴人

愛人は話が上手五月雨　神戸　霞川

生きて行く話にお茶がぬる過ぎる　新宮　三郎

殺さうか殺そまいかと蠅をみる　大阪　春光

今の世にびんづる撫でる哀れさよ　今治　心府

死んでもいゝ人に藥がよく効いて　大阪　たけを

寢るだけに歸る五月の田の影よ　大聖寺　醉羊

因縁はお前を食ふぞめじた鰈　大阪　窮巣

母と娘が南京豆に興じたり　同　冬光

遊戯する議論であればやめにしよう　愛ケ池　呑吸

死にたいとチョコレートが好きな女です　神戸　爍宵

年俸へ學資要る子もできてくる　大阪　北人

子病みて

無理も云へ々々お前の聲の弱過ぎる　大阪　無鬼

春の夜を佛壇灯へつかれきり　神戸　三思樓

水藥・少し殘して春の逝く　大阪　柳次

老鮮女孟子の母の如く居る　伊豫　芳岸

散髪屋氣轉きかして頭分け　堺　一柳

今日も又使つてやると汽笛鳴る　今治　十靜

顏の艶褒めて借金ことはられ　愛媛　孤鶴

母病んで庭のねぶかの太りやう　神戸　猥羅庵

地下鐵が走るうわさへ四月の陽　大阪　あや美

ヨーヨーをやつてる少女コケテイッシュ　同　九波

失戀か顎髭のびるまゝにして　同　幸男

ニセ物へ賣店瓦斯の灯が強し　同　素月

女學生に打算的なる希望あり　同　いの助

青い空あり僕の好きなニヒリズム　島根　羅門

ルンペンに晝が近づく影があり　同　青波

かたくなゝ父なればこそこの遺産　尼崎　虚白

すがる事拾てゝ淋しき酒に痴れ　大阪　万次

幸福は戀に盲ひし頃ばかり　同　利生

訣別の日と知らずして貝拾ふ　愛媛　宵明

あの本がほしいが足らぬ目をつぶる　島根　喜郎

眼鏡はずすと猿に似た俺　今治　曉童

一網にせられし後の夜のしゞま　岡山　素木

今度目は雲雀に生れて來てやらう　蟹ケ池　縷紅

ラツシュアワーの傘に都會の憂鬱よ　京都　昌一

子をあやす目は刑事とは思はれず　大阪　千代吉

二十一の戀マンドリンの糸切れぬ　蟹ケ池　一沫

生か死か大審院の壁時計　大阪　角丸

亡き父の墓へも春の花を立て　同　一久

非常時の料金を取る演説屋　高松　柳夢

街の灯にこうも光るよ金ボタン　松江　磨須雄

今日の地位たゞへい〳〵で押し通し　姫島　方眠

特長が三つあるなとカルカチュアー　大阪　雨蛙

案外に獣醫は小さいカバンて來
云ふ事がまだあるらしいつばをのみ
表情を忘れて蓄めて居るうわき
日曜を遍路の鈴に起される
經濟意識茄子の苗を五六本
パンに替ふべく蕾の根から切りとりぬ
トロツコ押す中の一人は日本人
造花でも飲めば花見の氣分は出
蹴持つてはて私も二十年
松葉杖振り向く人をにらむなり
自然にふれて希望の大いなる
子に買つたヨーヨー親が持あるき
下宿屋へ女給遠慮もなく上り
子を呼びに行けばハトトが居るお寺
愛妻の膝をくすぐる膳の下

松江　琴句樓
大阪　糠坊
松江　巷二
大阪　奥雄
同　操葉
同　夜王
京都　子鬼
臺ヶ池　舟家
高知　鐵吉
神戸　吉左右
石川　北陽子
大阪　朗人
同　星城
京都　ゆきら
大阪　ばつ天

春だからせめて帽子をかへと云ふ　神戸　彌之助

債務者の水晶の印見事なり　大阪　政太郎

撒水車殺人的な街を行く　松江　玲人

曰くあるらしい馳走へ猪口を置く　島根　鴉天

親馬鹿をはつきり感謝せし涙　松本　正司

大臣の寫眞と女優並べられ　島根　汀雨

心せと云ふか疾風に落葉焚く　松江　慕秋

汽車の窓春の女が覗いてた　大聖寺　萬保

非常時と別な世界の踊の灯　大阪　小三

人氣から素顏尊く見られたり　京都　阿鴻

チンドンヤ昨日と變る姿で來　松山　一紫

誰にでも戀して見度い春の風　臺中　耕朗

狂戀のマダムに鏡正直な　松江　赤陽

女囚ふと里子の顏が見たくなり　大阪　九文錢

しみつたれの眼にあれも無駄これも無駄　同　喜由

自由律川柳を駁す

福田山雨樓

本誌三月號で町二氏が、「定型非定型」と題し、自由律川柳の肯定論を提唱して以來、柳壇は頓にこの問題で活況を呈して來た。五月號には閑生氏が「かた言」に之を論じ、亂耽氏は「十七音字檢討」に定型律擁護論を揭げ、更に「川柳人」では「自由律試作欄」を設け、六月號に至つて國夫氏が「自由律川柳の登場に就て」を叫んでゐる。「きやり」もこの問題に觸れてゐたし「ふあうすと」にも觀太郎氏の自由律句評があつた。(其他二、三の柳誌もこの問題を論じてゐたやうに思ふが今確かな記憶がない)そして理論のみならず作品の上に於ても、その實踐を示しており、今や自由律川柳の擡頭は、革新的機運を釀生せんとしてゐる。

自分は曾て碧梧桐派の新傾向句に手を染めてゐたが、遂に川柳に轉向した關係もあるので、この問題には尠からず興味と關心とを持てゐる一人だ。殊に僕が最も畏敬する町二氏が、勇敢にもその先鞭をつけてくれたのであるから、自分として異論があるだけに、何條默過し得やう。聊か所信を訴へて大方の叱正を仰ぎたいと思ふ。

ところで自由律川柳を論評するのに、自分は茲で三つの點に局限して考へたいと思ふ。それは、(一)自由律川柳の發生根據(二)破調と自由律との差、(三)川柳の容器に付てである。こゝで斷つておきたいのは、自分は飽くまで十七字中心主義を信奉する者であることだ。

この問題に對して、何故自分が以上の三點に論旨を局限したかと云ふのに、自分の考へでは、自由律の問題はこの三點を究明するに非ざれば、遂にその本據を突當てることが出來ない。即ちこの三點は本問題の論歩に於ける大前提だと信じてゐるからである。

さて、自由律川柳は何故生れるのか、何故川柳は自由律に據らねばならぬのか。これに付て町二氏は「川柳が若し、我々の生活を反映する一つの呼吸とするならば、我々が現代に生きて呼吸してゐる通り、彼も亦現代に生きた呼吸をせなければならぬ。(中略)我々は無理に我々の言葉を定型にゆがめて、定型と言葉のギアツプを作り、ギヤツプの吐く混濁液に堪えなければならぬ必要はない。こゝに自由律の登場がある」と云ひ、國夫

氏は「今や複雑多岐なる現代生活感情を表現すべく、定形律は自らの矛盾を持て餘して全身の龜裂に喘いでゐると言はねばならない」と稱し更に「かくて自由律の背水の陣は其處に布かれ作句態度に關する定形律の遊戯趣味を清算する事も出來るのであるげにわれわれは、近來柳壇に於ける作品の類型化、一律化模倣化の諸現象の因を、この定形律の有する當然の缺陷に於て指摘せんとするものであり、之が正しき解決を企圖する自由律の登場は極めて意味深き役割を負ふべきものと思はれるのである。と述べてゐるが、果して斯樣な理由に基いて、自由律が肯定されなければならぬのか。兩氏が定型律を、又は定型律のみを否なりとする論據に於て、これでは餘りに抽象的であり、不徹底ではないか。どうしても自由律を要求すると云ふ強い理由に乏しいではないか。しかも敢然と自由律への觸手を延ばしその實踐に迄疾走するのは、如何にも倦み易い、新物食ひの輕薄者流だと思はせる身輕さがありはせぬか。

尤も兩氏は、定型律が持ち易い缺陷に付て、略同樣な難點を擧げてゐるが、その難點が不可避的のものであるのか、どうかには論及してゐまい。のみならずそれが定型律の宿命的自滅層であるかのやうに、輕視し劣惡視してゐるかに見ゆる。

斯の如き見方は、定型律を押し除ける爲めに、ことさらに用意されたと云ふ感じがする。これは大變遺憾に思ふところで、兩氏の態度が眞摯であるだけに甚だ始末が惡いのである。眞面目な論客である兩氏の所說を、僕の忖度であげつらふことは甚だ失禮であるが、自由律を要求する凡百の心理は、恐らく女の洗ひ髪のやうなものではなからうか。女が髪を結つて頭髪美を讃へてゐる間はいゝが、邪摩くさくなつたり、面倒になつて洗い髪の儘後ろに垂らしてゐたらどうか。本人は一時的にすが〳〵

粒々集

朝起の稽古かけふはお朔日　金澤　安川久流美

種痘の濟んだ兒抱いて阪は晴れ

疑は盡きず獨りの我となる

足袋の甲馳の四ついらだつ

朗かな鳥を羨やむ窓五寸　御影　長崎　柳秀

色ざんげして嘘つく紅をつけ

いけどりにされた姿の丸髷よ

事務官になつて藝者に名をしられ

正氣かと云はれて見れば剩錢多し

格言は格言酒は酒の味　松山　前田　五健

家庭では困る娘でスターなり

近寄つて見れば生きてる海老の髭

螢狩彼氏彼女へ泥濘があり

金魚鉢蹋む姿も十八九

失禮な姿で兄さん笛を吹き

しい、開放された氣持ちになるかも知れぬが、頭髪美は臺なしだ(それも斷髪のものならまた格別だが)それよりか女は女らしく入念に髪を結つた方が、どんなに美しく似合ふことか女は女の美を擁護しその本然の姿として髪を結ふべきであらうにも拘はらず、どれもこれもが丈なす髪をうつさばいてゐるとしたら、一寸世の中が異様なものになる。(斷髪美のことは後で述べる)

要するに自分は、自由律川柳登場の必然性乃至妥當性に大きな疑問否不滿をもつものだ。

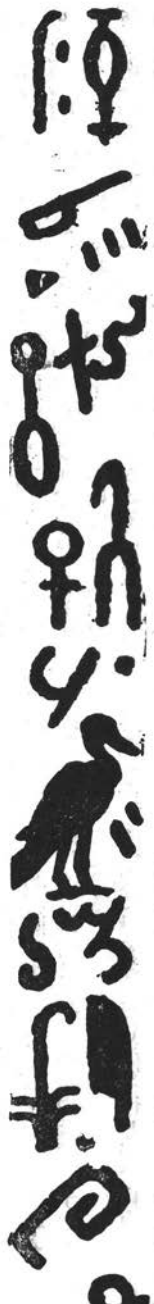
次に破調と自由律との差であるが、町二氏が例に擧げた即氏の句などは、僕は破調だと見る。それは總音字數が十七であることに於て、定型の容的範圍を超えてゐないからだ。自分はこの定型の容的範圍内の句、即ち十七音字以内の句は、句としてのリズム(定型律にはリズム論が不可分のものであるがこゝでは述べない)がある限り、定型律の止むを得ざる一例外として之を認めていゝと思ふのである。反對に定型の容的範圍外の句(即ち字餘りの句)にあつては、可及的最少限度の超過を破調として例外的に認容してもいゝと思ふのである。(自分はこのことをテニスのアウトラインを以て恰好な引例としたいのであるが茲には省略する)つまり破調の句は十七字が持つリズムに據るべくして據り切れない除外例の解禁であり、自由律は十七字が持つリズムを頭から忌違し、敬遠してかゝる無軌道電車、即ち其日暮しである。女の斷髪は云はば破調に類するもので、束髪とその容的範圍を接近せしめて、變つた頭髪美をねらつたものであると思ふ破調は定型律を意識し乍ら、それに據り能はぬ、所謂例外的存在であるから、猥りに作るべきものではない(定型律導奉者としてが止むを得ざる場合に之を用ひて、意外の好結果を獲ることがある。

自由律川柳ばかりが柳壇に横溢したら、川柳は恐らく其の妙味を破産するであらう。

最後に「川柳の容器」これは適當の言葉ではないが」のことであるが、自分は川柳味に就て、川柳はその形調美が齎らす持ち味も亦、川柳味と稱する範圍に加へらるべきものだと思ふ。川柳は川柳らしい簡素な強い言葉の調子をもつことが、川柳をして川柳ならしむる一構成要素をなしてゐるものと思ふ。俳句はこの點が稍異つてゐる。俳句の味は靜觀にあり、花鳥諷月にあり、眞如の描寫投影にあるが、川柳はその境地(創作意圖を意味する)に俳句とは異つた持ち味の添加が本質的に要求されてゐるのだと思ふ。その異つた持ち味の一つとして、句の容的範圍の緊縮さが必要とされるのだと思ふ。川柳は十七字又はその範圍内の短詩型を必然的に撰擇し、定着した所以はこゝにあるのだと考へるだから自由律川柳が、その自由奔放さを見事に示して、間の延びた、調子の弱い低いリズムをさらけ出したならば、遂に川柳味の含量を疑はるゝに至るであらうと思ふ。自由律一般詩への解消であつては川柳に非ずと排斥された場合、大童になつて、川柳であるとの強辯を用意しなければならぬであらうが、それでも無言な、白紙の批判が遂にこれを川柳から絶緣してしまふであらうことは、疑ひもなく豫想出來る。

川柳は、その形式上の容的範圍を無視して成立するものではない。そして該容的範圍の典型的なものに十七音字がある。雀郎氏の言葉を借れば、俳句に於て、芭蕉や蕪村が十七字を捨て得なかつた所以である。

要するに慣用形式に對する愛着と優越性とが、自由律を肯定すべく、餘りに根强く且つ正直であることを告白したいのだ。



武玉川初篇研究（十四）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(391) **後家しほくと青物の禮**

秋の屋＝良人が死むで、四十九日の精進中、青物を貰つた禮をいふのである。

東魚＝お説通りである。

省二＝吳れた人の家に出來た青物であつて、一層思ひが深められる。

(392) **明六ツわたる鵲のはし**

秋の屋＝七月八日の朝、牽牛、織女の二星が、東西に別れるのである。

東魚＝廓の別れも明六つをめどとした處に、此句の趣向があるのであらう。

省二＝然り、それ丈けの興の作。

(393) **鳥にさへ相言葉あるそとの濱**

省二＝「善知鳥」なる謠がある。卒都の濱の獵師が、殺生のむくひを冥土でうけるを曲としたもの、其中に「平砂に子を生みて落雁の、はかなや親は隱すとすれど、うとふと呼ばれて子はやすかたと答へけり」。夫木集にも「陸奥の卒都の濱なる呼ふ鳥なくなる聲はうとふやすかた」。善知鳥なるものに就ては諸說が考證されて居る。

秋の屋＝前說に盡されて有る。

東魚＝外の濱は普通外ケ濱といふのではないか。兎に角、外ケ濱を國境と考へた處に、相言葉の味がある。

(394) **顏て死ぬ蚊の兼て合點**

省二＝脛で殺されるよりは大にマシだ。「汝が針は只人の

油斷をうかがひ獨り口腹のため貪らんとす」などと、蚊は憎まれ者だ。

秋の屋＝「八笑人」に、かしなん亭安婆太郎といふ男があるが、これは顔で蚊は死なぬのである。

東　魚＝兼て合點と云ふ觀察が、誠に朗かである。

(395)

節季の息子算盤に乘

秋の屋＝「算盤に乘る」、「算盤に乘らぬ」といふ詞はあるが、息子の解釋が出來ぬ。これが持參嫁であると、直に解釋されるのだが、恐らく持參嫁を咏むだ句であらう。

東　魚＝節季の金はあの息子が當だといふ、花魁の算盤に乘るのではないか。

省　二＝多分そうであらう―無論持參嫁なら、一層明瞭なのではあるが、更に一考してみたいのは、古俳句にはお婿さんの方もある。「聟取や是も師走の添柱」（馬光）―聟になる人うつくしき師走かな」（紀逸）

(396)

脊中から寄る人の光陰

東　魚＝此句大變面白い。いかに元氣さうにみえる老人でも其後姿には爭へぬ衰へが見えるものだ。私の老父などに其感を深くした覺えがある。で此句は直に受入れる事が出來る。

省　二＝老母が家に居らるれば、左程にも感じぬが、一步外出された後姿を見ると、七十餘歲だワイと、いつも思ふ。

秋の屋＝兩君の解說に依り句意明瞭。

(397)

百姓の身に稀な手枕

秋の屋＝農夫は晝夜の勞働に餘暇がなく、手枕で假睡などといふ事は、實に稀有である。

東　魚＝木の根の枕は經驗しても、手枕なんなんといふ情味のあるオツな氣分は分らない。（エロ的の意味で云ふのではない）。

省　二＝働き通して、手枕さへ碌にせぬ百姓の恩惠を思はしめる。

(398)

温飩の誠初雪か降

省　二＝初雪ふる寒さに、手打うどんの馳走をする、「誠」は情味だ。

秋の屋＝初雪のふる時候と、温飩とに何か特別の關係が有るのではない歟。

東　魚＝寒いから温飩でもといふ時に、誂へたやうに初雪がちらついたと云ふのであらう。

(399)

吉原の屋根かと聞て伸上り

省　二＝一二寸伸上つたら、さぞ、渴望の吉原の屋根が、よく見える事であらう。人の思ひは面白いものだ

秋の屋＝篤實の聟殿、五丁町の屋根を遠望したばかりで、家內安全。

東　魚＝伸上る處に、いつてみたい氣分が動いてゐる。

(400)

覺へる事は女房か勝

省　二＝世間の或は家庭の雜事に關しては、女房は兎角記憶がよい。

秋の屋＝十年以前の良人の失策をも記憶する。

東　魚＝面白い。

(401)

ぬるい湯舟へ這入早乙女

省　二＝早乙女の感から、ぬるい浴槽は適當な道具立。

秋の屋＝此浴槽も泥田に等しいであらう。
東　魚＝多勢たち代り入れ代り這入るさまが想はれる。

(402)　**編笠を着てほんの眼の覺**

秋の屋＝冬編笠に反故紙衣を着なければ、兩親の慈愛は判らぬのである。
東　魚＝前出の「編笠の赤くなる時」と同じ趣。
省二＝334　參照、十七字と十四字の詠み方材料

(403)　**口上も二人へあてて千團子**

秋の屋＝俳書に「千誕子」「柄檀講」と記されて有るのもあるが句意不明。
東　魚＝千團子は月齡博物筌によると、「願ある者だんご千こしらへ鬼子母神へまいらするを參詣わらべもらひかへるにより千だんごといふ」とある。四月十六日三井寺に行はるゝのださうである。供物にしたのを貰つてかへるといふのだから、それを子供のある家へ分けて送る場合ではないか。「二人へあてて」は、兩親へあてての意味と思ふ。
省　二＝千團子を頒與する者を、千團子別當など言つた。二人は未だ疑問が殘る。

(404)　**情出して賣顔てなし唐物屋**

秋の屋＝昔の唐物屋といふものは、普通の商人と異なり、來客にも世辭を云はなかつたのであらう。
東　魚＝「情出して」は「精出して」であらう。一品賣れても相當の大きな利のある舶來物屋だから、あくせく賣らうとしないとの意であらう。
省　二＝明治時代でも、舶來物店は、聊か權式張つて不相憎なものではあつた。

(405)　**迯ると聞て水かさしたい**

東　魚＝愈々話が進むやうなら、出奔してしまうと迄厭がつてゐる緣談。可愛さうだから話の纏らぬ樣、水をさしてやりたい、とでも云ふのか。
省　二＝變手古な句だ。よい作でない。
秋の屋＝水をさすとは、甲乙兩者を離間する事であるが、前說では妥協させるので、まだ疑雲が一掃されない。
東　魚＝出奔は既に意中の人があつて、其人と迯げるといふつもりであつた。第三者の同情者が、ふつて湧いた緣談をこわしてやりたいと云ふ意に解したのである。

(406)　**子ともの色のわるひ筑しま**

省　二＝築島は埋立地であるから、濕氣も多からう。子供への衛生狀態も適當とはいへまい。（因に、東京の月島の月は當て字ならむ）。
秋の屋＝子供の衛生狀態の惡いのを、斯く咏むだものであらう歟。私は他に正解が有らうと思ふ。
東　魚＝子供は色白で人形のやうでありたいのに、筑島の子供達は潮風に吹かれて、お色が眞黑げだと云ふ意味ではないか

(407)　**淺間はもへて里の朝食**

省　二＝淺間の山にたつ煙にも馴れ、里人は朝食をとる「のどかさや淺間煙の晝の月」（一茶）などと詩趣を覺えたのもある
秋の屋＝淺間の煙を看ながら、麓の里人が朝飯を食ふ、只夫れだけの句であらう。
東　魚＝淺間の煙と朝の炊煙とを對照した心持ちもあるやう

に思ふ。

(408) **十年まへは獨おかしき**

省 二＝六十六年、三十三年、二十一年などを一ト昔と云つた時代がある。近世に及むで十年一昔と稱す。例へば初老の人が、一昔前を追回せば、微笑を禁じ得ない事柄があらう。

秋の屋＝十年如一日で、自分などは五十年以前の事を追想して、獨笑することがある。

東 魚＝全くこの感はある。

(409) **袖笠はしのひに成らぬ紋所**

省 二＝笠の代用をさせる袖、その袖の紋が、あり〳〵と見へては、忍びにもならぬ。

秋の屋＝白井權八氏も、丸に井の字の紋所から、雲助達に其身分を知られた。

東 魚＝曲くつた味は、前句に見合はして深い事にならう。

(410) **番神堂を廻る薙刀**

秋の屋＝番神堂は、三十番神の堂であらうが、薙刀を持つて廻るは、叡山の荒法師等であらう。

東 魚＝自說なし、解し得ぬ。

省 二＝三十番神堂なれば、月番に廻らねばならなかつたのだから。

(411) **庭鳥の鳴ころか奉公**

秋の屋＝一番雞の鳴くと共に起出て、主人の爲に働く、奉公の身も又つらい哉。

東 魚＝そこが勤め處だと云ふ心持ちを、巧く省略した叙法に現はしてゐる。

省 二＝奉公はつらからうが、然し人物は出來る。

(412) **子に持せても桔梗淋しき**

省 二＝桔梗はその姿、いと淋しい花だ。子供にもたせても可憐な花。「紫の中に淋しき桔梗かな」(斗六)。

秋の屋＝「奈良の葉の古きえらみに洩らされし恨みやはれぬきちかうの花」といふ。誰かの和歌があるが、實に淋しい花である。

東 魚＝中村大三郎氏の畫などにありさうな趣である。

(413) **志賀の寺傘疊む音がする**

省 二＝志賀は櫻の名所として有名、傘疊むは一ツ松關係。「降そふて居る志賀の勿躰」(不斷櫻)。「一筆書て志賀へ傘」(ム十四)。

秋の屋＝往古の志賀寺は、唐崎に近い地にあつたのである。

東 魚＝疊む音は乾した傘をたたむと云ふのであらうか。(前夜の雨を匂はして)。

(414) **きり〳〵す顏の重たき院の御所**

秋の屋＝「顏の重たき」は何の意歟。

東 魚＝きり〳〵すは、矢張今いふ、コホロギの事であらう顏はキリギリスにかかるのではなく、宿直の侍かなどの顏と云ふ意味であらう。重たきは憂深き心持ちと云つたのではないかこほろきのなく程さびれた院の御所を嘆いた心持ちかと思ふ。

省 二＝「春雨もああ聞ばとし院の御所」(ム十二)などの反對に、中七は氣の陰鬱を現示するものか。

秋の屋＝東魚君の說も有るが、後白河法皇の如く、院中の勢

力が強大で、朝廷を陵駕した例も有り院の御所は必ず陰鬱なものでは無いと思ふ。

(415) **生醉の心は直に道を行**

秋の屋＝生醉本性を違ばず、蹌々跟々としても、吾が家を知つて歸る。

東魚＝眞直に歩いてゐる氣なのだが、はたから見れば千鳥に歩いてゐると云ふのを、かう詠んだのであらう。

省二＝餘りお酒は頂かぬ方であるが、四十を越してから、此句の氣味あるを思ふようになつた。

(416) **さくらが咲て奥の前たれ**

秋の屋＝「奥」は奥樣の事ではあるまい。句意不明

東魚＝奥州の意ではないか。寒い間モンペをはいてゐた奥の女達が、春になつて前垂掛けの姿になると云ふ意味ではないであらうか。

省二＝思ひつかず。

(417) **寒の水棒の師匠に譽らるゝ**

省二＝寒の水は藥になると貯藏された。（ム九「寒の水蓋取つて見る春の空」）。棒の師匠とは棒術の謂。

秋の屋＝操棒術の上達するやうに、寒中水垢離をとり、神佛に祈願するのであらう。

東魚＝棒の師匠が呼吸つぎに飲む場合ではあるまいか。

(418) **杜若坊主の手から色がさめ**

省二＝寺院境内には、よく杜若が咲いて居るものだ、古川柳に「杜若あれ程後家にやりながら」。すると、坊主のくれる杜若は色かさめてもゐよう。

秋の屋＝花をくれるくれぬは兎も角も、閼伽手桶に入れられては、杜若の色も褪めるであらう。

東魚＝佛は浮ばれても、杜若はそれでは浮ばれぬ。

(419) **雨雲の時〳〵見世へ茶を運び**

省二＝見世をたとふとしても、空模樣が變なので、待合せて居ると、お愛相に、お茶を運むでくれる。—雨雲が出ると、陰鬱になつてはくるが、どことなふ人にたよる樣な、人情的雰圍氣が釀されもする。

秋の屋＝茶見世の女が、立歸りさうで立歸らぬ客に、幾度か茶を運ぶので、人情味的雰圍氣を釀してゐる云々は、如何であらう歟。

東魚＝場所場合が充分判り兼ねる。茶店らしくは思はれない。呉服店などではなからうかと想像される。

(420) **名古屋からなふられて來干大根**

省二＝此句は十一ペン其他にも出てゐて、かなり知られて居る。名古屋大根の句として居るが、秋農屋さんには、御意見がおありのようでしたね。

秋の屋＝先年「鯱鉾」誌上に、少し書いた事が有つたと記憶するが、詳細の事は忘れた。昔尾州侯より毎年十二月幕府に献上された、宮重大根といふのは、此干大根のことであらうが「鰯られて來る」は不明である。

東魚＝どうも解しかねる。

省二＝干大根はなぶる程、美味くなると云はる。—類吟を注意してみましよう。

(421) **神無月佛の御代に成にけり**

省　二＝八百萬の神が御不在になる神無月には、佛儀式が目だつ。さりとて「神無月まさか樒も賣れぬなり」（古川柳）であるかもしれぬが。

秋の屋＝此月には淨土宗の十夜、日蓮宗の御影供、眞宗の御取越、其外諸寺諸山に種々の行事が有るから、實に佛の御代とも云ふ可きである。

東　魚＝前說に盡きる。

（422）臺所から影ほしに惚れ

省　二＝（328）も影法師の句であつたが、「罔兩は水ものなから惚やすき」「ム十八」などとある。然し「惚られて居る瞽女の罔兩」（ム四）で、そこに影法師の本能性があるわけ。原句は人物を治定せずに、朦朧と命ふべきか。

秋の屋＝影法師に惚れるのは、風を係ぎ影を捕ふる如く、捉へ所のない淡い戀である。

東　魚＝影法師は女なのか、男なのか。隨て惚れた者も判じ兼ねる。恐らく、茶の間に起ち居する若い嫁さんの髮がたちの影を、障子越しに臺所から見た、出入の商人なり、女ながらに女中なりが、いい姿だと感じた場合を、「惚れ」と强調して云つたのかと思ふ。

（423）うらむ比丘尼の髮をほしがる

省　二＝「本復の比丘尼は結つてみたくなり」といふ位、髮を欲しがるのが女の情。恨むといふからには、比丘尼になつた經路も察せられ、髮を欲しがる理由はある。

秋の屋＝病の爲に長く伸びた尼の髮毛を、他の女がみて欲しがるのか、尼自身が男を恨む事が有つて、萬一髮毛が有つたならばと思ふのか、多分は前者であらう、只恨む意が不明である。

東　魚＝世を恨むで比丘尼になつたものゝ、時に執着が出て髮を欲しがるのではあるまいか。（松ケ岡などを想像すれば、馳け込んだ嫁の髮の美しさを見ては、いつそ髮に對する執着が起るであらう）。

（424）闇を躍て歸る屋敷衆

省　二＝屋敷には門限があつた。

秋の屋＝「闇を躍て」で、倉皇として歸る狀がよく表現されてゐる。

東　魚＝同感。

（425）御神酒はあれと青い庚申

省　二＝江戸時代には、半信仰半興趣的に、庚申待などしたものだ。此夜體内より三尸虫が出て帝釋天に惡事を報告し、爲に命が短かくなるなどの迷信から、眠をとらず騷いだもの、祭に青面金剛を以てし、道家の說と混合して、庚申青面と稱した「青い庚申」を用ひた句に、「女の智惠の青い庚申」（ム三）。

秋の屋＝青面金剛は御神酒を上つても、赤面金剛にならぬと云ふ理窟で、決して佳句ではない。

東　魚＝青いは一體冷な淋しい感じがする。青面金剛と云ふ事があるにしても、それを背景とした、感じの句としてとる事は出來なからうか。「あれど」。を强くとると理窟ぽくなりはする。

（426）白眼廻して妾の出代り

省　二＝妾奉公といふ以上、「出代」は面白い。本性違はず、にらみ廻してゆく。「羇旅漫錄」には、大阪で妾奉公人の引札をしたといふ記事がある。

秋の屋＝瞰み回して出代るは、下婢には無い事で、妬心深い妾の心理が、充分に表はれてゐる。

東　魚＝笑止千萬である。

再び川柳の飜譯に就て

笠原路生

近頃のことであつた。阪大川柳會の雜吟に私は次のやうな句を投句したことがあつた。

かも鹿の嬌羞に似て逃げる君

其時分私は動物の川柳句を多くつくつてゐたので右の句も其の一つであつた。餘りよい句とも私は思つてゐないが、實を云へば右の拙句はハイネの詩の一句を飜譯したのであつて、川柳の飜譯を論する上に於て揭げたのである。

右の拙句はハイネの「新らき詩」(ノイエ・ゲヂヒテ)中の一句

Sie foh vor mir wie'n Reh so schien.

(彼女は鹿のやうに左樣な內氣に私から逃げた)

を飜譯したものである。

「かも鹿の……」の句は巧拙は兎に角、獨逸詩人の詩の一句の川柳化した飜譯としては私は相當の自信をもつてゐる積りである。

獨逸の詩の一句から川柳が生れ得るならば川柳の獨逸語譯も或はある程度までは可能であるかも知れぬと私は思ふてゐる。

飛燕往來

私信のことですから公開を憚るやうなところは省略、中略、下略、又は××の伏せ字にしました、御諒承を乞ふ。

○**蛭子省二氏**(朝鮮) 謹啓。お手紙の中に句稿のはいつたもの(其前にヒゲの句稿も)確かに入手、御安神願上ます。

句稿が着くと直に選評して送るのが私の慣習なれど、實は去月來喘息が惡しく服藥しつつありし處、十二日頃より猛發作となり、醫師の注射を受けて、寢込んでしまひましたので快方の上選は仕ります。八月號には無論間に合せます。

昨日から注射を中止、峠を越したわけ、何分突發にやつてきて苦しむのですから、閉口致します。身体疲勞衰弱、今月內は專ら安靜に致してゐます。

歩行すると惡しく、談話も惡し、沈默裡に書見位より出來ません。

夏時に、こんなにやられた事は、今度が始めてです。

咽喉の受感神經を切除する外科治療ありと聞く、一度調査して確實のものなら手術を受けてみようとも思ひます、年中、こんなに苦しめられては、やりきれません。

それに、妻が右半身が痛み、用事をなす事が出來ぬので、病人同志で家庭內メチャ〳〵

植物園句會は結構、目先きの變つた催を計畫し得る處が都會の便宜ですから大贊成です、廿四ヘンの句は拜見致しましよう。

東京句會も結構、そういふ催も他社でやつた事がないのだから、よろしい。

關東關西の握手も多人數集つては お祭さわぎに終る。それよりは一社の連中のみが出掛ける事は必ず得る處がありましよう。

川柳の英語譯の困難であることは、いつか私は本誌に書いたことがある。川柳を外國語で飜譯して其の持ち味を風俗習慣のちがつた外國人に會得せしむるには先づ句を選ぶことが必要であつて、どの川柳句も飜譯し得ると云ふ譯にはいかぬ。併しある句ではわり合に其の飜譯が樂である場合もあるやうに考へられる。

川柳句であればどれでも飜譯し得ることの困難であることを例を擧げて述べて見たい。

戀の罠あの眼だろうか眼だろうか

この句は御承知のやうに路郎先生の句であつて私の好きな句の一つである。この句を獨逸語でもつてどう飜譯しても原句のよさは出ないのである。「……あの眼だろうか眼だろうか」と云ふ疊語法のもつ川柳詩の味ひは到底外國語の說話法では表現は出來ないのである。原句を最も平凡に飜譯して見ると

Ob wohl die Schönheit der Augen
Könnt' sein eine Fessel der Liebe?

(眼の美しさが恐らくは戀の罠であろう)

と飜譯して見ると原句の意味だけは恐らく理解されるが原句のよさは決して表現されてゐない。第一「眼の美しさ」(Die Schönheit der Augen)がいけない。原句の云ふところの「あの眼」は單に美しいと云ふだけではない、魅惑のある、人を惱殺する眼でなければならない、モナ・リサの美しいが併し冷たい眼であつてはいけない。

原句を次のやうに變へて見る。

Sind ri lit verlockende Auge
reizende Fessel der Liebe?

(人を誘惑するやうなあの眼は戀のうれしい罠ででもあらうか)

前よりもいくらか原句の味はでてゐるが、まだ原句に及ざること遠く「……あの眼だらうか、眼だらうか」と云ふ氣持は飜譯句には出てゐない。

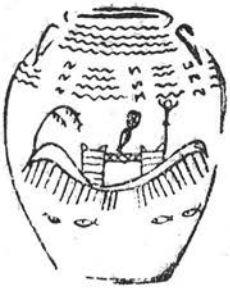
前の飜譯句より後の飜譯句が幾分か原作の味をもつならば私は尙筆を投ずるには早く、暫く努力してせめて原句のよさに近い飜譯をして見ようと思ふてゐる。

秋之屋氏の肱枕艸紙の原稿をモウ少し送ります、それで終局と致すように。其原稿と俱にヒゲの選も屆けましよう。

デは要用のみ御自愛を祈上ます。御夫人によろしく。十九日　敬具（綠雨宛）

○鈴木可香氏（名古屋）お二方の寄書はありがたう存じました。旅からお便りを下さる……こちらのことを御記憶にとめゐて戴けたと思ふと一層うれしいものです、紫も第六卷六號を出しました、滿五週年になつても記念會一つとはないといふ地味な私共、寧ろ意氣地がないからと見られてもそれまでの靜けさです。御地の華かる柳壇をいつもお羨ましく存じて居ります。傳統地盤に育まれた紫ですが、日に月に多少とも大兄の足下に近づくべく新しい句法を目指して作句を進めて居ります。御寸暇とて御座いますまいが、何か柳文でも戴ければ幸甚に存じます。鯱鉾が廢刊されて約一ヶ年になります。先月刊行創立した東海と中京柳壇は二社になりました。毎月の句會參會者平均三十五、六名は淋しいと思ひます。來る八月の靜岡で擧行される交歡會へ參るべく去月申込みました（綠雨、駿人宛）

○大西八步氏（福井にて）昨日大聖寺町へ至り風見草の方々に新しく會ひ、夜龜谷溪鶯氏宅にて茶撫耶、青豊、萬保、とよめ、牙城、溪鶯の各氏と作句、樂しき一夜に出會ひ申し年中半ばを旅に暮す身に取りて同好の士と胸襟を開きて相語ること無上の樂しみに有之候、一昨日は又小松にて柳村、柳一路の兩氏と面談仕り柳談に花咲かせ申し、綠雨兄當地方の出身なること以前より承知仕居候が、小生も北陸地方は早五、六年もほとんど毎月訪れゐる爲第二の故郷の樣なる氣持致し居り候。六月一日。（綠雨宛）



川柳塔

路郎選

朝田新水

存外の金取り替へた獨り者
それからの事を知らない抱主
ゐもりの天下畫のさびしき
濡手拭それも他人の忘れもの
人間の顏して遊女とや云はれ
荒い氣が起らんでもなし金を持ち
高島田明日から靴も磨かされ

吉田水車

磯の香についてまはれば絶景よ
夏の息女の肩をすべるなり
打水へ夜學の時間早迫る
絹扇ちと慌てたる話にし
成駒屋投票姿又撮られ

楊井二南

求職は眞白き壁に通される
朝日ビル働く人も滑りかけ
圖に乘つて云へば危なくなる首よ

同僚の結婚

金屏風未來を誓ふ聲に更け

病院はよそでないのだとも思ひ　阿部閑生

患者はんと呼ばるゝものゝ一人のみ

看護婦がいまはの思ひ偷むかに

一行に足らぬ手紙がわが子から　岩崎柳路

ベランダのパジヤマパイプに朝の風　福田山雨楼

子が匍うて行くで藥罐を敗鳴るなり

踏切で抱けばわが子が猿に似て

尺八の稽古の上の御尊影

狂人が齒莖を見せて五月晴　山本丹路

とはにとはに女のかけらを拾ふらし

呼ばれては廿日鼠の如く階段　橋本綠雨

輕石をもたして男ひげをそり

撒水が白足袋にちとかけて行く　松丘町二

起重機にわが肉塊を吊られたき

三疊へ乏しき光屆くなり　市塲沒食子

道草が過ぎた自轉車走らせる

子をなくしたる妻の手仕事

看護婦長オールドミスの域に入り

辭表を迫る謎の冷遇

今になつて僕の子でないとも言へず

飲む穩に涙と遠くかけはなれ

西村明珠

よそ行きの着物であるとしやんと坐し
大掃除疊と簞笥丈けの事
涼しさへサタンが覗きさうな闇
そねまずに嫁入りの荷を見てゐたり
子を連れて來て落着いてゐるメニュー

妹尾變人

親と子と居れば短かき日なりけり
そう〳〵は河鹿も鳴いてくれぬなり
素面で話せば短かい話なり
泣くな泣くな乳房が父にあるものか

首藤竹發

棒ふらの大悟してゐる形なり
古傷にいきなり觸れる久し振り

民族の力か南京町の聲

尼綠之助

いつはりの世に呑むことの多くして
ボプラが俺の家より背を越した
文相に强氣ばかりがある日なり

日野華水

百貨店婦人部らしいとこへ出る
好きでない奴から信用され切つて
ゆのし屋の暖簾よごれたまんまなり

熊谷紅

うなされるベツトを覗く稻光
氣弱さの心を叱るインキ壺

江戸みつる

あの戀も誰かに渡る日のあらん

岸上錦石

生活苦教へる撥は兜器染み
平社員トツプを切つた夏帽子

宮岡白峯

新綠の彼方二個連三個連
絹夜具のトラツクが行く街はづれ

松下小柳子

春の小川に淋しき心流し居る
子を叱る母親老けたなと思ひ

荒井英賀夫

退院は無罪の形で追出され
食へるのも食へぬのも居るや中の島

大西八歩

煙突と別に京都の春霞
絶景の道は大きく曲るなり

石森靜太

とかけが美しい僕の戀です
今は去りゆきし君思ふ掌のひらよ

奈良井柳人

兄といふ氣持に早く床を上げ

天痴人兄に

田植する君の野良着とする空と

水谷鮎美

現實はけむりのかすののこる雲
鼠の影にひとりゐるかな

喜多春秋

水源地青々と市の臺所
挨拶のやうに同情してくれる

石曾根民郎

年頃のわれにまばたく人も來む
人妻の算盤はじく音を許せ

姫田夕鐘

やゝあつて女は襖閉めに立ち

ホテルから後姿の君となり

せつしような植木が馬の顔を撫で

べちやんこの鼻へ煤のとまりたる

河合紫石

田植前四國遍路へつゞく雨

奥野禿山

按摩同士話にんまり片づける

中島鐵洲

見て來た强さをかしくもあり

生田翠夢

二人よればまた三原山の話

――路

「川柳塔」を從來よりも、ウンとゆつたりと組むことにした。そして句をこれまでよりも嚴選にした。句數はすくなくとも光ることを第一にしたい。

しかし、すぐれた句が多數に得られゝば、それに越したことはないので各作家の精進はのぞましい。

近ごろの柳壇は一般に佳句に乏しい。これは世活苦が作家のこゝろを壓して精進の餘地を考へないからであらうがさうした影響が「川柳塔」の作家にまで及んでゐることは作品を透して窺知することが出來る。

新水の「ゐもりの天下」や「濡手拭」の句は落着きがあつていゝ。水車のでは「夏の息」がデリケートな感覺を捉えてゐる。閑生の四句は弱い人間の呼吸を靜に吐き出したといふ句だ。句としては「看護婦が」と「一行に」がいゝ。山雨樓の句が近來めき〳〵といゝ方へ方向轉換をしたことはよろこばしい。從來彼が煩はされてゐた俳句が持つくさみと云つたものがなくなつて來た。「踏切で」の句の如きは容易に及び難い句であらう。「尺八の」の如きもたしかに摑んでゐる　この句を單なる穿ち句として見逃してはならない。

「粒々集」を再びこの欄から切り離したのでこゝに餘白が出來た。それで同人の句を拾つて簡單な感想を書いて見た。

句評陣

松盛琴人　山本丹路　西田艸樂　吉田水車　福田山雨樓

◇琴人

ニックネームで呼び合ふ程に醉っ拂ひ　大門

僕が酒を好くからと いふではないが此句の境地は矢張り甘黨連には分らぬであらふ。この親しみが 醉の醒めて後も、それば 忘れ得ぬ印象で、從て逢へば 又呑みに行かふとなる即ち妻君からは 惡友視されるでも止められぬは親しい友と 呑むことでもある、作者の實感句であらふ、親密さが よく受入れられる。今月の此作者の句は四句共甲乙が認められぬ。

天王寺もまれ〳〵てありがたし　虚白

此句は 前書にお彼岸とある、この春の彼岸に天王寺へお詣りした時に 出來た句らしい、川柳としては別に特異な點も見出すことは出來ない、たゞ素直に自分の心持は述べたものであるが、下五のありがたしといふ心境が此時に浮んだといふのは 其處に目に見えぬ(他の人の氣付くことの出來ぬ) 感激があつたのであらふ。殊に作者虚白氏は二三日前に念に死去されてゐる、其處に人間の果敢なさと同時に何ものか 深いものがあるのではないかと、遂に此句を再吟味すると、下五が益々まだ老い先きの長い 人の口にするものでないことに想到して 心を打たれるものがある、川柳は決して遊戯でないと 呶鳴り付けられるやうな感もする、そして上手な句を作るよりは眞實な句を作るのが 本當だといふことも教へられる。

夏めく日風船割れた兒の笑ひ　司郎

此句は無條件に共鳴出來る、斯ふした感じは俳句では表現は難かしい、立派な新らしい川柳詩である、同じ作者の句で

爆笑の後へ頑張るビスケット

といふのがある、これは所謂川柳味と云はれる一部分の滑稽が句の上に 濃厚に現はされてゐる、然も題材は共に子供の笑ひを捉えたものだが、一方後句は川柳味に重點を置いて作句されたものだが、一方は作者自身の持つ眞實の感激を詠ひ 出されたものであると信じられる、爆笑の句も決して惡い句ではない否此方を採る人が多からうが、僕は今一歩進出した「夏めく日」の方がより新らしい內容を持ち且つ詩的である點に共鳴をする。

勉强をなさいヨーヨー取上げる　道子

女流川柳家として 光耀抄より近作へ進出した句主の努力は、遂に報ひられて男性のトップへ肉迫してゐる、句は皆日常生活を素直に川柳化してゐる、然も一讀女性らしさの個性が現はれてゐる、これまでヨーヨーを取扱つた句ではどれも餘りよい句がない。否寧ろつまらぬ句ばかりで誰れの句か知らぬが「ヨーヨーがヨウヨウ出來て」なんとか云つた句が話題になつてることも聞く位であるが、此句は題詠ではないから、句に切實さがある、句意は改めて解釋するまでもなく、ヨーヨーに遊びほうけてゐる 子に對しての或時の母としての人親らしい心から 戒めた言葉が其まゝ句に成つて何等の技巧もないが、それが其まゝ立派な川柳になつてゐるのは、眞實といふ力が斯くも第三者に 感鳴を與へるのであらふ。

◇ 丹路

金力をはじき返して淋しき夜　素木

ありきたりなプチブルの退嬰的な感傷を嗤ふ人が、或ひはあるかも知れない。けれどさう一概に默殺し得ないものを感じる。それは「淋しき夜」で結んだ凡な人間味である。これは妙に僕の心情に食ひ入つて來る。惜しむらくは叙法上、餘韻の不足を告げてゐることだ。

はてしなき想ひリンゴのまがる　波櫻

句主の近況を知る者には、この句の持ち味がよく分ることであらうが、全然句主を知らぬ僕にとつては、たとへ句境はうかゞえても危なかしくて、句を恨みたくなる。けれどそんなせんさくは野暮の骨頂だ。たゞ句のふんいきに醉へばよいのだ。ごらん―句主がニコ〳〵笑つてゐるではないか。

スイスイと蜻蛉が舞ふ死の行手　洋々

上五中七の朗らかな表現と心境に對して「死の行手」と來た。どうも「行手」が氣になる句主の言はんとしてゐることは察知し得らるゝが、そしてそのよき心境も分るが、叙法の點で損をしてゐる。臆測を許さるゝならば餘りに五七五に捉はれ過ぎてふいと浮んだ「行手」の語をもつて來たのではないか。これは餘りに大膽な臆測ではあるが、作句過程に於て僕自身こうふ場合によく出合つてゐるからで、僕自身に對する一つの警しめでもあるのだ。

待ちぼけを食つてすわれる春の風　一沫

愛すべきカリカチュアである。在來待ちぼけの句は殆んど安價な感傷に終つてゐるのであるが、それ等の句を聯想させる餘地のない程、妙味ある句だ。下五が秋の風であれば私も亦默殺したかも知れい。凡な春風を之ほど活かし得たのは作者の將來ある手腕だ。よき小品ではある。

横顔へ家の暮しを打明ける　十七八

句主は老練な作家である。巧まずして咏ひ得てゐるのは絶えざる精進の賜であらう。けれどまた餘りに易々に作りすぎてる批難も聞けるだらうと思はれる。とまれこの句の隱れたる技巧と、地味な作句態度には敎へられるものが多い。

◇ 艸樂

夏めく日風船割れた兒の笑ひ　司郎

作者は若い。二三の女の兒に取卷かれて風船をふくらまして やる樣な、無邪氣な時間を持つ事もあり得る。大人の息で一杯に膨らんで行く風船をまぶしそうに打ちながめて居た子供等前でパチッと破けてゴムのちぎれがフワフワと飛んだ。ワハーと一同が笑ふ。その明るさ、かう云つた情景をはつきりと詠むだ處が嬉しい。

道樂の嵩む欠伸と見てとられ　山雨樓

取材は珍らしくない。道樂の過ぎた欠伸、だけでは全く面白くないが、下五の「見てとられ」でこんな平凡な取材に作者の性格が生きてゐる。山雨樓氏の句は「制服へ女給うかつな眼をなげる」式の思はず襟を正す樣なのが屢々ある。

休職の閣下電車にぶら下り　利生

ぶら下り、と云つた諧謔の文字を用ひても只のユーモアと看過できない氣がする、休職の勅任官閣下が、金ピカの嚴かめしい將官かなどであれば周圍の眼を憚くであらうが、此の場合無造作な服裝の閣下であり、人目にも觸れない態度を作者がある ユーモアを感じた即興の句と見る。句は客觀描寫であるが、作者は何か主觀的文字を入れたかつたのではないか、句はこのまゝで惡くはないが、少し物足らぬ氣もする。

誘惑を待つ心なり少し　醉ひ　えいを

よく纏めてある。若い時たれしもこんな時があつたであらう。「待つ心なり少し醉ひ」全く川柳的表現を忠實に、巧みに踏んでゐる處賞すべきである。相當に功を積まぬと纏らぬ處だと思ふ。

だまりやで淋しがりやで天井の節　有爲郎

自嘲と見る。併し天井の節で落ちつけやうとするには少々亂暴だと思ふ。それで作意が讀めても一應讀者を狼狽さすものがある。自分がそうであるのか、他人の事か。又天井の節が此の場合作者の感情を十分に訴へる事が出來ない。句意は自分の好む所であるが、作品には惜しまれる點がある。

◇　水　車

留守番の淋しくなれば水を打ち　大　門

日常茶飯事も川柳眼によつて活きて來る、此句は今迄の留守番から一歩出てゐるやうだ。水を打つのは門口でも庭先でもよい狀景はよく出てゐる。

日々狹く住んで靠れる壁があ。　荷　平

古俳句に　これによく似た意味のものがあつたと思ふがそれは柱に靠れてゐた、此句のは壁であつて初めて利いてゐる、日々狹く住んでしかも　此境地を巧にものしたのは偉とする、狹く住むと言ふ叙法の餘韻がたまらなく胸を打つ。

病人が時計のネジを卷けと言ふ　曉　童

一種凄愴の感がする、長く病むと非常に淋しく頼りなくなり神經が鋭敏になる、ネジを卷け、が只事でない、うすらいで行くチクタクの音すら病人には　限りなく哀愁を覺へるのであらふ、時計の止つたこよりネジを卷けと教へた見付けがいゝ。

長いトンネルを遊戯しつゝ往く　正　夫

此句はこれだけのものであるが、且つて三土鐵相が工事中の丹那トンネルを視察した折　其並ならぬ難工事を見て「僕も將來此トンネルを通る度には此工夫達の　かくれた勞を想ひ乍通ることにしやう」と言はれたことを新聞で見たのと思ひ合はせて妙である、たゞにトンネルばかりでなく　これが社會の實相であるのだ。

人生の永さにあかす甘藷を食ひ　蛙　念

農村の情景、さびしい諦觀、けだし農村に限るまいが　此句は前のトンネルの句の反對をうたつたもの。しかし内に何か燃ゆるものゝあるのが判る、下五を置き變へれば多少句に動きのあるやうだがむしろ突拍子な、甘藷を食ひ、が莫迦に味を持つのである。

◇　山雨樓

風はなつかしい母とゞく髪匂ふ　羅　門

海紅や層雪にありさうな、新傾向の俳句みたいな調子の川柳である。風は「なつかしい」と云つてしまつては　味をこはすと俳人は云ふかも知れないが、この場合さう云はずとは居られない熱いものがあるのだ。その點荒削りとも云へようが純な初々しさが響く。僕はこの句は定型律に即した破調の句だと見る。句の内容は母への深い愛慕が　秘められてゐる。湖と綠の微風が薫つて來るやうだ。

あるゆうべ友の身なる鴉來る　寒　子

さびしい、非常に淋しい氣持が惻々として迫つて來る。そのさびしみは單なる孤獨感や寂寥味ではなくて、人間の親しみから遠ざかつた情感の缺乏を意味するものであらう。眞つ黑な口の大きな鴉、そんなものが親しみを渇望する人間の心に何の足しになるか、と疑ふよりも見向きもしないものが　多いであらう。かゝるときに鴉は何等の虚飾もなく、その貧弱なる姿を運んで來るのだ、――友の身となつて、遠方から。

挫折しさうだ燈明を上げよ　いわを

挫折と云ふ言葉は堅い。だが一句讀み下して見ると、その堅さが別段障りとなつてゐない。寧ろ悲鳴をあげたいやうな傷心の氣持ちをぶちまけてゐるのがいゝ。作者は弱々しい心の持主とも見られるが、その反面に純な敬虔なそして素朴な性情が包まれてゐる。「燈明を上げよ」は何と云ふうるはしい、人間味のこもつた(この場合特に)言葉であらう。

氷嚢におが屑浮いて影をもち　閑生

病臥の際に生れた句であらう。ぴち〳〵と活躍してゐる場合には、こう迄纖細な物の見方は中々出來るものではないと思ふ。病臥の爲視界還境が局限された場合には、心が沈潛し、内攻して眞實への接觸面が拭はれ磨かれる。そして鋭敏になる。氷嚢も、おが屑も、氷もが唯の冷却な微細な存在に過ぎないが、こうして磨かれた詩心に透視されて見るといみじくも可憐な美の脚光を浴びてゐる。

筍の賣りのこりたる廓の灯　豆秋

いつも乍ら豆秋君の朗かな句境ではある。賣れ殘りの筍がころ〳〵と微笑してゐるではないか。下五の廓の灯は芝居がかつてゐると批難するものがあるかも知れぬ。だが安心なことには正直な豆秋君は、木に竹をつぐやうな小刀細工は嫌ひです。「賣りのこりたる」は「賣れのこりたる」の方が正しい言葉遣ひのやうであるが、この句の場合は「賣り」の方がしつくりとしていゝ。

紙面の都合で次の句へ、手が延ばされないのが遺憾である。

餡玉一つころがつた(まり)故障バス　大門

金口を捨てればならぬ人に過ひ　慈雨來

紹介所冗談もいふ仲となり　青米

好奇心それも視察と申すなり　水車

青竹の籠になる日が思はれて　新水

寢言とは父あまりにも不甲斐(なき)　明珠

ふるさと山はかすみの切れた(ところ)　夕鐘

しやぼてんに心みられてゐた(ものか)　鮎美

肩上をつけて男かへたとさ　沒食子

メーデーへ餡れつてゐる松屋町　豆秋

大阪の別離

見てあればしきりに(ものを)灯(ともし)雨も　民郎

全國川柳交歡會

時　八月十九、二十、兩日

所　靜岡市及び其の附近

大略日程

十九日　朝、御到着、朝風呂の後安倍川餅、淺間神社等市中一巡——晝食——東海の名園浮月樓にて句會と講演、引き横き歡迎會に移り鄕土舞踊などお目に掛け——夜の散策から驛前清鶴樓に一泊

二十日　朝九時頃より自動車を驅つて久能山、龍華寺、次郎長銅像、三保羽衣の松等を見物、三保の海水浴場に到り晝食——こゝにて或るは舟遊びに、或るは海水浴其他に半日を寛いで戴いて船にて清水波止場に渡り(船の嫌ひな方は自動車)電車にて靜岡へ歸り解散の豫定。

右が大体のプランですが、打ち寛いでなるべくのんびりと川柳の交歡を兼ねて、二三日避暑にでもお出かけのお心持ちでお出かけ下さいます樣、已に浴衣の圖案も完成いたしました。何分にも手薄の當地、通信其の他に今後手落ちなぞ不行屆きも點も御座いませうが、お許し下すつて「靜岡なら來年も行きたい」と言はれたくといまから心ひそかに願つてゐる次第、何卒御聲援、御參加下さいます樣お願ひ申し上げます。會費拾圓(申込のとき内金二圓頂戴、浴衣送呈)

主催　靜岡川柳會

本社十週年記念事業の一つとして

東京句會開催

川柳の社會化を主唱して茲に十星霜。その機關誌「**川柳雜誌**」は全日本は勿論遠く海外にまで羽翼を延ばして光輝燦然たるものがあります。我が社は斯かる歷史を一層意義あらしめんがために關東川柳家の應援の下に今秋十月中旬の佳日を卜して**本社東京句會**を開催することにした。全國川柳家諸賢の參加を切望する。日時、會場其他に就ては追つて發表する。

川柳雜誌社

日本名所名物川柳

大阪之巻

麻生路郎選
大西長三郎畫

日本の名所名物を川柳で殘したいと思ひ、その第一着手として手近な大阪の巻を約一ヶ年計畫で發表することにした（路）

（一）道頓堀

母親へ叛き道頓堀に咲く　變人

裏表なく道頓堀灯がともり　方眠

塗下駄で通る道頓堀の雨　葉光

これからが道頓堀の氣になつて　曉童

大阪へ今朝着きました道頓堀　三汀

道頓堀借りのあるのを思ひ出し　新水

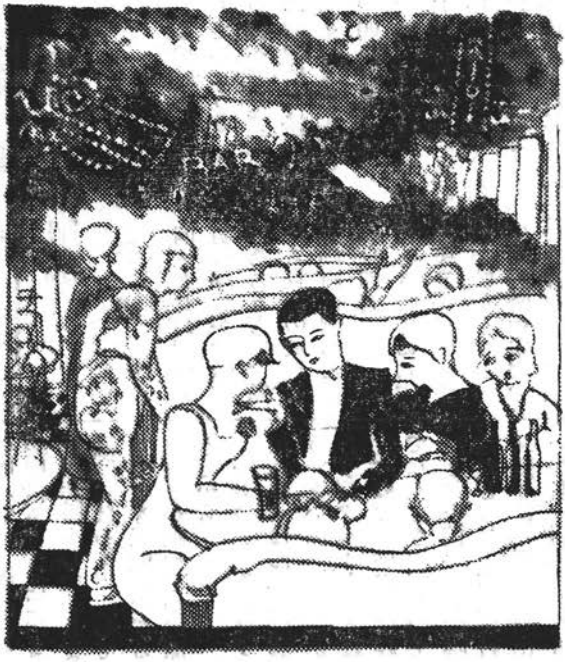
道頓堀なんにも落ちてゐなかつた　紅

道頓堀夜べの紙屑流れゆく　正夫

大阪やさかい道頓堀も立ち　翠峯

ダムへ來て道頓堀と別な風　山雨樓

道頓堀さくら同志が話してゐ　靜太
相生ばし誰を待つのか妓がひとり　葉平
欠伸したはづみ道頓堀の空　雅幽
使ふ氣へ道頓堀の灯がこびる　八歩



働かぬ指が道頓堀でもて　雨少

道頓堀淋しい男帶がたれ　文蝶
北濱で別れ道頓堀で會ひ　雅幽
行先を言はづ道頓堀へ出る　いわを
道頓堀辻へ嬉しくもめてゐる　八歩
ついて來いと道頓堀の暗いとこ　豆秋
赤玉の灯を貸ボート眩しがり　琴莊
道頓堀通り抜ければ元の吾　冬光
道頓堀苦勞してゐる人に會ひ　かほる
道頓堀に幾夜死なねばならぬ身の　雅幽
道頓堀の雨松竹の軒を借り　えいを
孝行の一つ道頓堀を見せ　豆秋
旅鞄道頓堀の朝を悔ひ　琴莊
道頓堀哲學君は泣いてるね　青踏
道頓堀滿月さへも忘れられ　春光
花嫁を道頓堀の灯へさらし　舟々
老境をしみ〴〵道頓堀に知り　夢裡
此處が道頓堀さと二人につきあたり　琴人

雜筆春秋

田にしの黑燒

蛭子省二

この春は家を出で、四五ケ月の行脚をしてみようと、家族に打合せたが、承諾を與へない。理由は色々あるうちに、私の弱體にては、到底かかる長期の放浪に堪え得べくもなく、前回旅宿に倒れた例で明かだといふ。――私は四月に入つたなら、モ一度膝詰談判だときめてゐた處月始めから、頓に體力を失ひ書見續かず徒に氣忙はしく、頻りに嘔吐を催すように、こみ上げてくる。客と對談中など、我慢しきれなくなつて、冷汗を流す。二日も三日も家族ともの言はず、憂欝に過す。重健散など服用して、容態をみてゐた。――爲に行脚の話どころでなくなつてしまつた。――どうもいけない。遂に診斷をうく。胃が悪い外に、懸塾垂が充血してゐるといふ。何にか咽喉につかへるようなのも、夫れがためであらう。私の喉小舌は、普通の倍長で　尖端舌上に接觸横ふ。こんなのもある事はあるらしい。其後少しはおさまりつつあるが不快通院にはあく。果して懸塾垂關係許りなるやをも疑問とせざるを得なくなつた。蛔虫とか腦性とかの原因するのもあるそうだから。

一老翁が「それはタニシの黑燒が特効がある。なんなれば製つて差上げましよう」といふ。又黑燒かと内心微笑しつゝそうだタニシといへば、もう十年以上も食べぬ、子供の時は好きであつた。黑燒でなくとも、煮たつてよかりそうなものだと、一椀を求め食膳に上せた。鮮人は常食となし、市場に行けば賣つて居るし又賣りにも來る。消化の好いものではないから、胃痛患者たる私は、十つぼ位でやめておく。昔は軍中にこれを粉末にして貯へ、湯でこねて食へば腹もちよく、容易にへらぬ。然かも早春或は冬中のものを良しとするは、夏秋には毒を食ふからだといはる。

食道樂家が集ると、木下氏著「美味求眞」に、田螺が悪食篇中に加へられてゐるのえ苦情が出る。元と悪食なる語の範圍が限定せぬ以上、見解の相違は致し方がない。食用蛙など、今日では悪食でなく、親子丼と稱えて食用蛙が煮こまれて居る。時代的嗜好の推移である。日本でも支那でも、タニシは古くから食つた文献はあり、進歩した調理法もあつた。私の家族は皆きらふ、客に尋ねてみてもいやだと云ふ人が多いうちに、ひとり「結構ですヨ」と相槌をうつので「では一盃やつて下さい、私はズウトやめてゐるので、お酌致しましよう」。「サアお宅のお酒なら……お酒丈けなら頂戴致します」私は今度飜刻された「獨あるき」の一句

葉隱れの柚までさがし馳走好

を思出し

恥しと客にかくすや田螺あへ　凡董

よりは「葉隱れの柚」の趣向が望ましくはある「ある人の閑居にいたりて」と前置して

夜嵐や翌の柚味噌も梢より　蓼太

嵐の後の靜寂を思はせる。太閤が不意に利休庵に足を留め、空腹だから一椀の馳

走に預りたいとの御所望、利休は米を洗ひ釜の湯にうつし、柚一つもぎ來つて櫨味噌をつめ奉つた。嘉肴にあく口に、此淡味は無碍透斷だ。　私の安價なタニシは少し理窟つぽいのだが客はどう受け入れるか。

酒が廻りかけた頃「川柳詩人は風變りだから、食べさせられるものに油斷がならぬ」タニシは氣味惡しと、遂に告白してしまふ「然し、食つた事はあるんだらう。タニシ食つておくと二日醉をしない呑むうちに一方から醒めてゆくと言はれて居るから、お勸めするのだが、三歲圖會にもあつた筈だ」。手近の書架から取出してみたが、二日醉の事も懸塗垂の事も載つてゐない。

煮飲通大小便、治浮腫　搗爛貼臍亦佳
取汁搭痔瘡脇臭、燒研治瘰癧癬瘡。
長途行人田螺煮乾貯之、每一箇食則令不中於異鄕水飲。

と。だが類似の河貝子には「醒酒」とあるから、田螺の効能も、酒呑は心得として置いてよい。兎も角一般人が餘り好まなくなつたのは、食用蛙と入れ替つたわけ、將來は惡食の部でよい事になるかも知れぬ。

そこ〳〵に京見過しぬたにし賣　蕪村

竹田、淀野から賣りに出たもの、都人も「田螺も腥物」と賞味したのである。川柳詩にはタニシを材料としたものか乏しい手控に一つもない。僅かにこんな句が記憶からうく。

例年の如くたにしと濁酒なり（古川柳）

此句は雛祭の供物を詠むだもの、守貞漫稿に「江戸にては蛤及び螺を供す、京阪にて螺を供せず」とある。

雛の日に上戸の門やたにし賣　葉圃

その賣聲は耳に爽かであつたであらう。

タニシを食ふには白味噌和良し、胡麻芥子に和すれば内大に腫すと云ふ。燒きつゝ味へば柔くて佳。私は物の色澤を失ひたくないので、極めてあつさりと煮る野趣が捨てられぬ川柳家中にはタニシ好きも居られようが、やはり田にしの課題を見ない。斯る方面は俳諧のものだと、狹まく考へ見逃してしまふ樣では、詩感が到らぬと言はねばならぬ。

里人のへそ落したる田にし哉　芭蕉
景政が片目をひろふ田にし哉　其角

詠史でもいや味がない。

春嬉し田にしの鳴くに及ぶ迄　葛三

「田螺なくといへる……農俗よく是を云ふ、早春雪消より耘耕の頃まで、田間常に其聲を聞くといへども、心を用ひざれば、その何んたる事を知らず、予過し春頸城郡にありて、始めて其田螺なる事を聞きたれば、心を用ひて耳を傾くるに、古呂〳〵の聲寂寥とかの長安の皷吹にも恥ぢざるべし」（北越奇談）―私の住む田舍に於てさへ、自動車の雜音等、田にしを聽くの風流は得られない。イヤ私が「壁にぬられた田にし」で動きがとれなくなつてしまつて居る。（四月下旬稿）

（追記）―其後、料理の友社代理部の廣告を見ると、田にしの黑燒は淋病に特効ありとして、例の通り感謝狀などが印刷されて居る。一老人が私の懸塗垂の患ひへ流用してきた、世間的知識の油斷のならぬところを年の劫だワイと獨り笑つた。

もらつた批評 其他

廣江天痴人

六月號合評で私の貰つた批評は私をたじろがせる。無論指導的意味で又激勵の意味で言つてあるには相違ないけれど、私の詩魂は射すくめられてしまつた。重い荷を擔がされてしまつた。スランプに陷沒した今――その穴の上へ大岩を覗かされた思ひでいつぱいだ。

綠之助氏の「あん馬氏の横顔」は嬉しかつた。あん馬氏への謝恩川柳會へ止むなく缺席した私は、その罪滅しの意味で何か書かして貰ふ考へだつたに――。あん馬氏への恩返しは好い作家になる外私には途が無くなつた。

今日松江のMが來た。松江の作家の間で泥仕合が始つたらしい。珍しくもない事だ。切角手を洗つた　私だ野良の太陽とわらつてをらう。だが先輩顏の醜さがチラ〳〵するナア。

こんな事を書いてると「ほとゝぎす」がしきりに啼く。今年は今夜初て聽いた。蜜柑が咲いて寢間まで强く匂ふ。蛙の聲が入亂れてる。螢も出るナア。

――（五月十三日午後十二時記）――

地上地下

ヨシダス井シヤ

我大阪にも待望久しかりしメトロが走り出した。その日に時代の先驅者たる光榮を荷負つたほどの人は皆泣いた。ホントに涙を流して。隨喜の涙かしらず、自らが作つた化學のたゝりホルマリンの臭ひのためであつた。一哩當り萬の金を費ひやして出來た地下鐵は、單に大大阪の面目的存在のみならず、國防上重大な意義のあつて、一朝有事には直に電車の代りに人間が入つてすし詰めになる筈。其時には皆裸になつてそして團扇を持つことを忘れてはならぬ。通風換氣のためにバタバタやれ、とは由々しき何某博士の御名案である。何がさて人里はなれた地下三十尺ヒンヤリすることは請合ひ。さしずめ今夏からは、涼しさに地下鐵往復したりけり、なんてことになるだらうし又、地下鐵へ逢曳場所が一つ增へ、などは副產物として必然性があるか。

街のげいぢゆつ家があぐらをかいてヴアイオリンを奏いてゐた。一寸立ち止つてきいてみたが、何の曲だかわからない五六歩行き過ぎた時後から流れて來た哀音……それは御詠歌であつた。（終）

夢を追ふもの

亡き愚陀君のプロフイル

毛利九波

今頃になつて亡き伊藤愚陀君の事を語るのは若くして逝つた彼の周圍の人々に再び悲しみを起させないかとそれを恐れる。

實際私が彼の死を知つたのは本誌二月號の記事によつてゞあつた。

あの彼が川柳を創つてゐた。私の最初の疑問はそれであり又彼の死であつた。しかし關西學院在學中の略歷と懷しい故

人の童顔と金釦の制服を着た彼の寫眞が私の疑問を一瞬にして悲しい現實にして仕舞つた。

愚陀君と川柳、私はどう考へて見ても不思議でならなかつた、何故なら彼と知合つた原因といふのも彼が水泳部の選手としてゞあつたから（恐らく彼は其頃既に誌上の同人だつたに違ひない、そして彼が川柳を作つてゐたといふことを私達に秘してゐたのだらう。僕一人の憶測であるが、もし彼が川柳云々をしたなら其頃の私達は一笑に附し剩さへ解す可からざる意味の下に波を經蔑？したかも知れない心使ひがあつたのだらふと思ふ、夫程私達は川柳から緣の遠い者ばかりだつた）。

彼は文學部に私は高商學部に在つた、何時か私は笑つて云つたことがある。

「君見たいな男が文科に居るなんて」

彼は只ニヤ〳〵笑つて答へたに過ぎなかつた　彼の文學的な才腦を知らない私は彼をたゞスポーツマンとしてしか理解して居なかつたのが餘程彼には可笑しかつたのだらふ。

私は彼の丈夫そうな小肥りな體軀とスポーツマンらしい豐頰と何處かぼんやりした彼の話し振りからして簡單に判斷したに過ぎなかつたのだ。

其頃既に彼を見誤つた私が彼の死を知つて抱いた疑問は當然だつたかも知れない。其頃私は文科の愚陀の中學時分の友達と同宿してゐた關係で寮の方へもよく遊びに來た。私達は一つのグルツペを作つて散々カレツヂの讃歌を高唱しギヤング振りを發揮してゐた頃だつた。試驗前なぞ彼と撤夜して私がもう眠ると云つた時彼に酷く叱られたことを覺えてゐる。親しみ易い彼の童顔、眼鏡を掛けてゐる故か時々彼の視線がピントを脱れて見えるのを私は可笑しく感じ餘計彼に親しみを加へた。それでも人の好さゝうな顏をして

「おいS昨夜また飲みにいつたんか」なんて云ひつゝのつそり部屋に這入つて來て赤い洋書をぽんと疊の上にほり出して甘そうにバツトの煙を默々として樂しみ乍ら麻雀のメンバーの揃ふのを待つてゐたものだつた。その彼とも私がある事情で突然學校を止してから殆んど逢ふ機會を失なつて仕舞つた。其後時々阪急や朝日會館などで逢つても「此頃どうしてる」一位であつさり別れて仕舞ふのだつた。最後に彼と逢つたのは丁度昨年の秋寶塚中劇場で前進座が古典的な龜山の仇討を上演した時だつた。何でも彼は劇研究會の部員として、丁度秋の關西學院の記念祭にペヱジエントを開くその見學の爲に部員と來てゐるんだと語つた。あの藤田畫伯のように伸ばしてゐた髪を丸刈にして合變不人懷い口調で。私は失禮にも彼がその容貌で劇を演ずる場面を想像して限りないユーモアを感じた。しかし薄暗いシャンデリアの下か或ひは怪奇な舞臺のだんまりの雰圍氣の故かも知れぬが、日燒した彼に元氣のない何處か憂鬱な横顏を認めたのが彼との最後の夜の强い印象だつた　そしてそのまゝ記念祭に再會を約したまゝになつて仕舞つたがその彼がまさか亡くなつたとどうして信じられ

よう。

私は川柳界では未だほんの初心者に過ぎない、だから決して彼の遺句について批評じみたことは云ひたくない。彼の句は私に過去の夢をもたらして呉れる、彼の句は川柳は現在のそれに對して少なくとも革新的な作品だが五月きやり誌上に分派せられたイデイオロギイ派川柳に入れたくない。シュルレアリズム且て文壇に劃期的な派を稱えた横光利一の新感覺的なそして久野豐彦の持つ夢幻的な色彩更に現代の中河正常のナンセンスを織り込んだ、無論その中には若人の持つ純情と野心的な創句法、戀と夢を追つた青春の持つデリケートな惱みを川柳的な語調によつて表現することを忘れなかつた。私は二月號の住田亂耽氏によつて發表せられた彼の遺句についてのみ語る範圍しか知らないが、彼の句を見ると私に過去の夢を再現して呉れる點共鳴し讃美をおしまない。

彼の遺句を愛唱し新しく彼の幻を畫き出そう。

何はさておき春は戀せん
唇を許せし夜のセレナード
夜の街に海月に似たる女あり
のむことをいつはらぬ子の淋しきか
枕にとへば枕は寢ろと云ひました
首を並べて春の汽車行く
河童同志愛の言葉は泡になり
逢ふ日もやはりバツトなりけり
猫の觸感が娼婦の咽喉に住んでた

十月の夜の心齋橋、醉ふた視覺には殊に街の灯がより赤く上り青かつた。彼と共に飲んだビール、そして滔々と語り合つた戀愛、映畫、スポーツ論、そしてY談、彼の句から私は無限に過去の青春時代の黄金時代たる數々の樂しかつた夢を滿喫する。私と彼との交友はほんの短いものだつた。しかも共に學園の空に語つた夢を彼の句によつて追ふても決して故人は私を責めないであらふ。もし彼が生きてゐたら私の最よき先輩として私を指導して呉れるに違ひない。そして私が少なくとも現在川柳に精進してゐることを彼が知つて呉れたらどんなに喜こんで呉れるだらふ。そしてこれがせめて若くして散つた彼に對する私の貧弱な餞けにしてペンを置く。（四・五・夜）

寺子屋の幕より

姫田夕鐘

紙治や梅忠の專賣物を何度くりかへしても同じことをやらない。どこかのしぐさを技巧してゐる苦心の程があり〳〵と思はせるのが鴈治郎である。凝性などゝあつさりかたづけるわけにはゆかない藝術への猛進であらう，おそらく死ぬまで

鴈治郎は花道の出に、五六分間前より熊谷とか治兵衛にちやんとその人物になりきつてからチョボに乘つて出てくるがこゝらが名人としての心組であらう。

川柳もこの意氣で精進せねば嘘であるといつもながら考へさせられる。

今度の寺子屋も新演出を三ケ所氣付いた。

(1)は源藏の花道の出に三分にかゝつた時左へ一寸首を斜にしたしぐさ、七三に

かゝつていつもの思ひ入れと二段に切つたのは歌舞伎座の花道の長さの故と思ふ

(2)は首實檢の時いつもなら眼を見開いて睨みつけてゐるが、今度は眼を閉ぢて身がまへた。松王が菅秀才の首に相違ないで、はつと眼を開いた點。

(3)は襷を襦袢の上にしてゐた、これが本當らしくて良かつた。

僕は鴈治郎の以上の新演出が眼に殘つた。ことに菅秀才の無事の姿を見て喜ぶあたり何度觀ても瞼のあつくなるのを覺える。全く藝の力であらう。なんと言つても日本一の源藏役者ではある。

菊五郎は總體にあつさりやつてのけた押出しはさすがに立派であつたが、病人らしくはなかつたが、咳入る下りは無類の味がある。「無禮者」での見得も大きく「よく討つた」で眼をそらすあたり兩優の熱演が相待つて舞臺に寸分の隙が見つからなかつた。

首實檢の時白紙を口にせない。これは敵の首を實檢するに何ら敬意を表す譯はなしとて止したと云ふのが、菊五郎の意見と聞くがこれは一理あると思ふ。

涎くりは男女藏だが、ごめんなさいとかおばさんとかの東京言葉が耳に付いたこゝはやつぱり、おばはんと言はないとピンとこん。こんな役は成太郎や長三郎の方が一枚上であると思はせた。

福助の千代、魁車の戸浪は定評のもの悪いはずはなく、友右衛門の玄蕃は上品で動きが少なかつたが、かへつて面憎くうていゝと思つた。(八・六・三)

雜記帳

松丘町二

○近頃柳誌に現れた論說で、一番興味深く讀んだのは「たまむし」五月號の地暗黑藤氏の「如何にして川柳は詩として可能なるか」といふ文章であつた。このじやん・こくとう氏が何人の匿名なるかは知る由もないが、詩に對する理解が深く論旨も相當行きとゞいてゐて、いつどの柳誌にでも見出される底のものではなかつた。川上三太郎氏が今の多くの川柳論は、藝術又は詩の文字を川柳に置換へた代書移盜論であると輕蔑して云はれたさうだが、これは冗談だらうと思ふ。三太郎氏ともある人がこんな知惠のない言葉を眞面目で吐かれるとは思へないからである。世の多くの川柳作家達はせめて代書移盜論の一つも書けるやうに勉强することだ。

○「既成作家への反抗を第一義的な態度とせよ」と川端康成が最近言つたさうだいゝ言葉である。反抗とは傳統や先輩を侮蔑せよといふのぢやなくて、徹底的批判の上に立つ闘志を意味する。自分のものなら鼻糞まで褒められねば承知がならぬ既成作家と、その鼻糞を有りがたさうに思ひ込んでる新進作家とで、川柳の藝術化が行へたら、天勝以上の魔術だらう文藝春秋子は云ふ「あらゆる既存の權威と評價をくつがへさんとして興るところに、新しく現れ出づべきものゝ使命がある」と。新人諸君よ、立て!!!

○「川柳人」六月號に中島國夫氏が自由律

川柳の登場について書にてゐられる。氏の定型否定と自由律肯定の論旨は決して目新しいものではないが、對度がはつきりしてゐるだけ堂々としてゐる。そして同誌上に現れた自山律川柳を見て、その第一歩を誤らなかつたこれらの諸作品と諸作者の今後の發展を大いに祝福したい自由律の句が現代語を使用すべきことゝ現代社會機構の生活反映でなければならぬといふ決定的要素の認識と實踐とを誤らなかつたことは、一層我々に期待と興味とを繋がしめる所以である。

○黒木鵜足氏が「たまむし」で物言はねば腹ふくるゝことに就て書いてゐられる尤もな言葉である。僕など特にこの症狀がひどいので困る。人の悪口を云はぬといふことは美德にちがひない。こんな話をきいた。如何なる場合も悪口を云はぬことを社是とし、亦そのことのためにあらゆる家庭に迎へられて、盛大を來してゐる某大娯樂雜誌社の雜誌に掲載される立志成功金儲美談が、田舍の青年達を刺戟し、競つて都會へ飛出させる。そしてそれらの成功談が巧言令色的僥倖談に過ぎず、都會とは華美の假面をきた譎詐のルツボであることに氣づいた時は既に遲い。總てのものを失つて彷徨するルンペン群の多數が彼等の末路であるといふことを。――どうも川柳の世界でも阿諛と盲從はあんまり藥にはならぬらしい。中傷的言辭を弄するは別として、徹底的批判の眼を向けたら、悪口とも見える俊嚴さを帶びもしやう。悪口を云はぬといふことは、人前で公言するほどの美德か知らん。

○「アラ、ギ」を出してみたら、蕪村の俳句が卷頭に掲載されてゐた。「同人」を出してみたら、歌人研究の長い論文が連載されてゐた。云ふまでもなく前者は短歌誌で、後者は俳句誌である。彼等が互に相手の長を採り短を補はうとする研究的態度は、確かに立派だと思つた。川柳作家にとつて短歌や俳句の技巧や精神が、他山の石でないとは誰も公言し得ないだらう。

終點

關本雅幽選

A 組

醉冷めて終點そゞろ寒くなり　阿鴻
いつちさき降り終點こけかゝり　銀波
終點へ遠距離なりし腰を延べ　一笑
終點のうどんやだけが起きてゐる　心府
終點へ來て乘り越し詫びてゐる　呑湖
終點に主待ち顏の犬がゐる　笛秀
終點の少してまへのコンパクト　遊歩
目的もなく終點へ來てしまひ　千代吉
終點になつて乘り越しあわてだし　露洲
終點で降りて生醉ひ水を呑み　祥月
終點の夜更け櫻が浮いて見え　いわを
終點で今日の約束待つてゐる　磨須雄
黃昏の終點妻の目と出會ひ　幸捐
終點を旅客機一度やりすごし　春光
終點の線路へ淋しい草の生へ　山月
人生の終點近い日陽ぼこ　九波
行く春を終點で知る陽の流れ　莞路
飲食店並ぶ終點待ちあぐみ　四五磨
終點がどしや降りに逢ふ賑やかさ　良之佑
何か食ふつもり終點の陽を見つめ　吉左右
終點で子供をあやす運轉手　富美三
終點が近かく車掌等話してゐ　いの助
終點で車掌ヨーイ〳〵やつてをり　九文錢
終點で思ひ〳〵の足になり　星城
終點だ帶のゆるみも締め直し　子鬼
終點のこゝから先はバスに搖れ　方眠
哀別に終點の灯が暗いなり　勝二
終點へ出る近道の靴の泥　竹雅
終點の延長工事の灯がともり　曉童
大金を持つて終點遠いこと　元山
終點で暫し電車も息をする　燦宵
終點へコクリ〳〵と春の雨　糠坊
生醉ひのまだ終點で駄々をこね　無鬼

川柳家戸籍調（續）

係　山雨樓

（1）姓名（2）雅號及別號（3）生年月日（4）出生地（5）現住所（6）職業及又は勤務先（7）好きな句（8）自信の句（9）川柳以外の趣味（10）配偶者及子供の有無（11）嫌ひなもの（12）川柳に手を染めた年月

（327）　柴田五萬石

（1）柴田伊之助（2）五万石、靜雲堂（3）明治十六年十月十二日（4）靜岡縣安倍郡豐田村（5）横濱市中區常盤町六ノ七八（6）齒科醫師（7）鳩は一度教へて呆れ果て、舌打ちでふるまい水の禮は濟み（8）春の人何處を浮世の風が吹く、諦めて暮らす浮世は面白い、香水の好みも變へて惚れて居る（9）一寸書き切れない、（10）澤山あるやうな無いやうな、此點支那人式なり（11）無し（12）祖父が所謂雜俳の古いのだつたので子供の時からやらされた、自分でいよ〳〵やり出したのは明治三十五年頃から

（328）　和田默然人

（1）和田榮次郎（2）默然人、軟骨、蝸牛舍（3）明治十六年八月十四日生（4）横濱市（5）天津日本租界伏見街四ノ三（6）被傭人（月給者（7）君見たまへ菠薐草が伸びてゐる、東洋の星に寢てゐる冬木立、喃笊よお前幾つで嫁にゆく、橙に心强くも一ツの葉、これやこの瑞穗の土の一にぎり、鳥の骨なんか知らない山の色、（其

終點で降りるのですと大晦　美津女
終點へそれ〴〵荷物下ろしかけ　蝶路
花電車終點へ來て見盡され　銀雪
終點で一人降りると丸るい月　青兒
うつら〳〵と終點に來て起され　柳夢
終點へ母は疲れた顏で降り　萬保

B　組

終點のとこから地圖を書いてれ　北陽子
終點へ搖れあふてきた戀と知り　喜朗
終點へ着いて女は强くなり　三郎
終點に近くスピードかけられる　菊路
終點でも何ンにも言ひ得ずに別れ　ばつ天
終點の向ふに俺を待つ灯影　吉祥
分讓卽終點からはバスがあり　角丸
終點へ內職の荷が幅を取り　喜由
終點に近く哲らく高架線　沒食子
終點の電車小さく晴れ渡り　三汀
終點で降ろされてゐる涎　巨鯨
終點と氣付かぬ程に疲れて居　詩郎
終點で話しはそれつきりになり　富士雄
終點をねんごろにする馴染酒　ひさし
終點へ電車大きく曲るなり　春秋
終點へ降りた足から空を見る　禿山
好い月の終點欠伸で降りるなり　葉光
終點を日稼ぎらしく降りてゆき　今雨
あわれとも思へ終點までねむり　三代吉
終點は今日の棒事を知らぬ顏　宵明
終點へ降りて淋しき我が影よ　世都象
終點で思ひ出せない人と降り　たけを
まとまらぬまゝ終點となつてゐる　錦石
終點で待つてる方が金を持ち　同
荷造りがゆるんで終點程近し　變人
終點は冷めたい風の吹くところ　同
あつけなく終點となる地下電車　素月
終點は壞われたバスも並らんぬ　同
終點で休む車掌の瞳の疲れ　紫石
不景氣の話終點までつゞき　同

C　組

終點へ子連れの客は醉ふてゐる　孤鶴
これまでと車掌も降りてしまへたり　朗人
終點で醉つてる身體支へたり　月茶
終點に名殘りを惜むぼん〳〵や　青波
終點で惚てさすのも都會の灯　水車
終點は電車の向き變へるだけ　利生
終點へ着いた童心空のまゝ　新市街
終點の夜霧同んなじ顏が降り　紅

他書けば盡きませんが際限がないので）(8)ひたすらに木魚心の戸を叩き、溫室の苗かと見たは貫族の子、秋晴れの眞下で口を可愛がり、新婚の襖を覗く風白し骨壺の深さ僅に五六寸、同情の泪にしては鹹し、自信など一つも有りませんが貴意に投じたものがあれば倖せです。）9）特に是と申す程のものなし(10)配偶者有り、子供なし(11)特に嫌と云ふものなけれど、時行を勵行せぬ人間が大嫌ひ(12)確と覺へてゐませんが大正十二年頃と考へます。

(329)　大窪文芳

(1大窪文美(2文芳(3明治二十三年十月十日(4)松山市(5)名古屋市中區八百屋町三ノ二一(6)伊豫國產伊豫絣販賣(7)例句を擧ぐれは限りなし、穿ちを生命とした奧深い句(8)自信を以て進んで斯界に示す念の作をいまだ得ず(9)謠曲(10)妻あり子供も三人(11)洋服を着た年頃以上の女(12)明治四十二年頃。

(330)　道田葉平

(1)道田順康(2)、葉平別名は時々氣分に依つて變へる(3)明治三十五年一月十四日(4)東京市神田區駿河臺西紅梅町六番地(5)大阪市西成區西皿池町二七(6)テキスタイル、エンジンヤ(7)深い人生哲學が含まれ句、又は追悼句が好。ひそまりゆくをみし、鯛の眼。思はじと椿

夜遊びは終點までの連れとなり　明珠
終點まで買ふてぐつすり草疲れる　柴陽
終點へ車掌ぶつきらぼうになり　同
澤點で降りれば馬鹿に見られたう　六郎
終點ですなんと無造作に降ろされる　同

兄弟

兄に似ぬ弟口が廻り過ぎ　明珠
皆勤をして兄弟の日曜日　四五麿
不幸なる兄弟として引取られ　三郎
弟に叱られてゐる裏の木戸　春光
七光り兄弟共に世に出でる　良之佑
瓜二つ兄弟別な店を出し　多美子
國を出て兄の仕打を忘れる氣　呑湖
兄弟が順に竝んだ洗面器　禿山
肩書をすてゝ兄弟酒を好く　吉祥
兄として弟として腹が立ち　春秋
兄弟の意見の違ふ嫁が來る　一羊
入墨をして兄弟にされてゐる　紫陽
兄弟が揃ふて見たい旅の空　變人
兄弟の祈りに熱河戰も無事　青兒
家出した兄へ弟眞面目なり　遊歩
兄の趣味ちと弟へ堅くなり　水車
灯の下に兄弟丸う〳〵寢る　新市街

（軸）我れを迎へた終點の灯がまたゝきぬ　雅幽

選後

選に當り先づ出句者各人の全體の句を觀てABCの三組としました。從つて選句の尺度が組に據つて異つたつもりです。

朝田新水選

兄よりも弟を賞める通告簿　銀波
兄弟の望みを父は笑ふだけ　九文錢
弟と間違へられた電話口　阿鴻
兄弟の雄圖の中に世界地圖　喜由
猪口持てばやはり兄弟らしくなり　子鬼
支那服でゐて兄弟のすぐわかり　幸捐
言葉なく兄と朝餉の膳に就き　柳人
兄弟も他人と知つた生活苦　銀雪
安樂な位碑兄弟に圍まれる　宵明
煮えきらぬ兄の態度を齒痒がり　菊路
兄弟が仲よく歸つた下駄の音　たけを
カフェーて兄の噂をフツト聞き　燦宵
兄弟の鼻へ異性の匂ふ年　紫石
一本の傘を兄弟ゆづり合ひ　十靜
喧嘩して來たに弟の肩を持ち　孤鶴
悲しみをかくして兄を訪れり　青波
兄弟へ唯涙する母であり　六郎

の花を火に焙べて。荒鹽の色をさびしみ柿の圓うさに、今日の息づく。一葉の輕さとなつて歸る土。つゆをまるめてゐるつゆなりしよろこばし。ひとり起つを待つ轉けし子に萩晴れて(8)狂はざる男にカンナ火に咲きぬ(9)靜かな雨の音を聽き乍ら國文學の研究や戲曲も物したい。天氣のいゝ日はテニス、徵醺に聽く小唄や清元のしんみりした夜も惡くない。歌舞伎もいゝ。グンスもいゝ。漂浪の旅にもでたい。たまにば身も燒き焦す戀もしてみたい。深夜の街を醉つて短歌の朗咏もいゝ。氣の合つた奴と好な妓と淺酌低唱なんかも乙だ。こんな事をして暮せたら大いに愉快だらう(10)妻なし、一女あり四歳健也(11)大掃除滿員電車、出雲屋のまむし。南京虫、賣名、おべつか、生臭い魚、熱のない打つても響かぬ人間、既成の二字を冠、すもの一切、曰く既成品既成政黨、既成川柳等々(12)十六七年になる、だが八九年前つく〳〵川柳の下らん事を痛感して短歌雜誌「土」詩歌「病める世記」と云ふ本を出していたが一たび川柳卽人間を知つて飜然と詩を歌を俳句を捨てゝ一路道に參す。同人が一人でも生きてる間はたまむしは廢刊しないと云ふ鐵錚々と鳴る信念に共鳴し生活を人間をやめぬ。以上川柳を捨てぬてふ確信を得たから、たまむし吟社の同人に加る。

兄弟の子供の時ほど親しめず　いの助
化けものゝ話兄弟手を握り　紅
兄よりも弟の育丈伸びてゐる　富士雄
青早の惱み兄弟默りあい　元山
弟の戰死に兄は默禱し　笛秀
職業の上兄弟親しめず　世都象
弟が惡いは母も知つてゐる　巨鯨
兄弟のない淋しさの灯のあかり　萬保
弟の學資をつくる蹴のたこ　詩郎
兄弟の數を聞かれたはづかしさ　曉童
兄弟の成人するを母は待ち　喜郎
弟が夜の銀座を見せてくれ　竹雅
病身の兄を撮して慰めるいわを　
財産の無い倖せに兄弟勝二
職工となつて兄弟國を出る　祥月
兄と云ふ事が云はせる强意見　糠坊
同じ柄着る兄弟の紺絣　浚食子
兄弟の揃ふて優等美まれ　露洲
兄だけは留守番と云ふ日曜日　山月
兄に濟まない女を想ふてゐ　莞路
兄弟の仲へ小金も出來てくる　吉左右
弟の樂しむ菓子をうばふ兄　葉光
氣が合はぬでもゞ無口な兄と俺　心府
兄弟の樣に育つた二人です　美津女
父母の安神兄弟仲が良し　方眠
兄弟の話へ妹編みつゞけ　北陽子

間を借りてゐても兄弟賴られる　星城
大飯を喰ふ弟へ兄の胸　ばつ天
兄は只笑つて末の子母と寢る　九波
兄弟のひがみに母の落ちつかず　蝶路
兄弟の屑と云はれて旅に生き　利生
泣かされた弟からが先に寢る　柳夢
兄弟が白眼視する遺産分け　ひさし
弟の氣樂と別に黑くなり　月茶
朗らかな朝兄弟の靴の音　磨須雄

優秀

弟の言譯兄が叱られる　明珠
人を救つて四海兄弟　春秋
重態と見て弟を慰める　鶴峰
兄弟の讓り合ひたる影を見せ　民郎
格言を見て兄弟の力　瘤幸
兄弟をかくして女落ちぶれる　今雨

軸

水泳の選手を兄に持ちながら　新水
母の病を兄弟が談じあひ　同

選後

應募諸氏の玉吟へ多數の全沒者を出したことは甚だ相濟まぬ次第ですが、類句の多かつたことを痛感致しました。大別すると兄弟喧嘩、義兄弟、兄弟と酒！女！麻雀、鯉のぼり、選擧、趣味、野球、ヨーヨー、病身、出世、赤貧、双生兒、繼兒姿の子、子心親心と云つた具合で今迄に云ひつくされた句ばかりです。今後ともこんな課題に就ては餘程新しい方面へ進み度いと思ひます。

NishiNo.Cho MEMO

雨綠

▼別稿の如く本社では十周年記念として東京句會を催すことになりました。本社の社友同人から多數出席の申込が續々とありますからこの際地方の社友同人も參加されるやうおすゝめいたします。申込は本社事務所宛のこと。

▼本社六月例會は庄萬よし君が再び市會議員に當選されたので市議當選祝賀句會に變更致しました。

▼募集吟は從來三題宛でありましたが社の都合で第十卷第十號より二題に改正致しました。

▼路郎主幹の主催で木村半文錢氏の句集刊行記念會を七月十二日夜卓球タイムス社で開催されることになりましたから多數出席されん事をお願ひ致します。出席者全部に句集(百數十頁)を贈呈されるそうです。

土産物

鶴峰　選

○

お土産に故郷の山が浮ぶなり　四五磨
土産物待つ子へ父の懐手　遊歩
お土産の笛を父うさん吹いて見せ　葉光
土産物裏畑から持つて來た　磨須雄
彼女の土産スヴランの匂ひ　萬保
土産屋の客を待たした不易糊　幸捐
磯の香の強い土産を手渡しに　ばつ天
土産店こゝで買はふか好い女　莞路
おそいなあパパの土産を待つて居る　喜郎
秘密を含める土産物と知れ　世都象
逝きし母の土産待つてるいちらしさ　六郎
土産物まだ金策に觸れてゐず　竹雅
重かつた土産驛にも賣つて居る　銀雪
なつかしい訛りに更ける土産物　紫石
三味のまゝ師匠土産の禮を云ひ　たけを
息災な顔を土産に戻つて來　孤鶴
傳説の土産に旅の陽は暮れる　十靜
御土産へ嬉しい手紙添へてあり　利生
鐵砲の土産で母さん先づ擊たれ　燦宵
土産などよせよと友の手が溫し　錦石
土産物出張先きは雨だつた　明珠

福田鶴峰
須崎豆秋　共選

土産物揃ひの折を提げてゐる　一羊
叔母ちやんに戴いたのよさと見せに來る　菊路
土産物見せたい子供ゆり起し　青兒
土産物買ひは買ふたが味知らず　柳夢
土産物君と飲まうよ幼な友　柳人
借金をしに行く父へ土産と言ひ　九文錢
網棚に張り子の鹿がぶらさがり　銀波
手土産がそろ〳〵話す金の事　紅
御土産へ俺も御世辭を言ひすぎ　勝二
筍の土産玄關響かせる　禿山
死線越へ醫師へ感謝の土産物　笛秀
珍らしいものをと土産まだ買へず　紫陽
ぜんまいをかつてそれ〳〵お土産よ　喜由
湯の花のかほりもゆかしこの土産　美津女
肝心な人へ忘れた土産物　巨鯨
土産物傳説をきく峠茶屋　曉童
土産物先にとゞいて兄が來る　富美三
よろこんで土産を提げる迎ひの子　山月
酒のみの酒呑みらしき土産物　方眠
タクシーは搖れる土産の紐は切れ　祥月
此の次を約束してる土産物　いわを
土産物置而きどれ〳〵と孫を抱き　朗八

▼本社の主催で九月中旬植物に關する川柳會を催すことになりました。當日大阪市天王寺公園長宮南裕氏が植物に就ての川柳漫談をして下さることになりました。

▼庄萬よし君大阪市會議員立候補され本誌の愛讀者の御後援に依り再び當選の榮を得ました事を皆樣と共にお喜び申し上げます。

▼加茂川句會一周年記念句會が六月十日夜京都仲源寺で開催されました。本社から路郎先生、琴人、かほる、雅幽、新水、鶴峰、變人葉平の諸君と私が出席致しました。なか〳〵の盛會で幹事の司郎君がニコ〳〵してゐました同君の勞を感謝せずにゐられません。

▼野上修一君が幹事として和歌山縣に野上支部を新設することになりました。第一回を五月七日夜宗光寺で催されました。本社から琴人、水車、夕鐘の諸君が出席されました。

▼高野山九度山に六月十日夜川柳會が組織されましたのでその發會式に本社から山雨樓、一杉、夏曉の諸君が出席されました。

▼北山梧郎君天滿から船場へ引越されたので天滿支部の名稱を九三會と改められて六月十一日夜改稱句會を開かれ今後も引續き聞路、柳次、八步の諸君が協力されて句會を催されることになりました。

追つかけて行つて土産をねだつて怒ることあつて土産を開けずに　糖坊
土産物どつかに嘘がある様な　元山
土産物父のこのみを知つて居る　三郎
土産物子にはどかして笑ふてる　變人
土産物旅舘の傘を借りて出る　浚食子
土産物富士が見えてる障子明け　吉左右
同

佳

團體が去んで土産屋飯にする　三汀
置き土産こゝろを添へて逃げるなり　民郎
雷燈の紐をのばして土産物　變人
土産物擴げて腰をのばして居　浚食子
土産物母のまつ毛のぬれてゐる　吉祥
土産物朝日のとゞく居間へつき　新市街

○　豆秋選

挨拶のショールの下の土産物　竹雅
土産物コウモリ傘が邪魔になり　銀雪
玄關へ母を呼んでる土産物　紫石
こゝいらの柄ときまつた土産物　たけを
息災な顔を土産に戻つて來　孤鶴
氣安さは土産の値に聞いてゐる　十靜
湯の街の土産素見すホネムーン　利生
鐵砲の土産で母さん先づ撃たれ　燦宵
土産物襖の向ふで開く音　宵明
土産物何時も新聞包みなり　白峯
お土産は妻へうれしき守札　錦石
手土産の人形で姉妹揉めてゐる　菊路
土産物選り取りせよに兒は迷ひ　笛秀
土産物待たす子供とマリを投げ　一羊
お土産に故郷の村が浮ぶなり　四五磨
兒へ土産妻は氣の毒そうに起き　葉光
土産物待つ子へ父の懷手　遊歩
留守番へ土産の紐をきらせたり　明珠
土産物そそつかしい手と手と手　變人
シデ紐がゆるくなつてる土産物　青兒
歸郷した起立議員は土産なし　柳夢
子の笑顔思ひうかべて買つてゆき　千代吉
土産物で君と飲まうよ幼な友　柳人
土産物旅舘の傘を借りて出る　吉左右
土産物の返しに芋を背負はされ　富士雄
出張の旅費で土産を買ふて來る　阿鴻
新婚は土産を一つ忘れて來　九文錢
手土産を詫びて握らす五十錢　銀波
怒ることあつて土産を開けずに　元山
氣忙しかつた旅を土産物に見る　巨鯨
シデ紐が食ひこんでいる土産物　曉童

▼春元紀太君は六月一日滿洲方面へ視察に赴かれました。

▼松盛琴人君と私とが京都加茂川一周年句會に出席して當夜一泊翌日八瀬大原、三千院寂光院を廻遊しました。

▼生田翠夢君は五月廿一日鞆の浦へ鯛網見物に行かれました。「大漁へ島は威勢のいゝこだま」翠夢の句。

▼平岩司郎君は五月廿八日堅田から彦根へ泊りがけで琵琶湖を周遊されました。

▼大西八歩君が、商用で山陰から北陸方面へ毎月出てゐられますのでその旅先の北陸線大聖寺の川柳家、溪鶯、茶撫郎、青豊、萬保、とよめ、牙城の諸君と一夜樂しく句作され、小松でも柳村、柳一路君と親しく面談されたとの便りを寄せられました。

▼日野華水君は五月廿七日熱海方面へ旅行されました。「溫泉に浸つてお宮考へる」の句を寄せられました。

▼竹内機見女君は熱心な作家ですが近頃齒を患つてゐられるので句會に出られぬのを殘念がつてゐられます。

▼森律子くらま會を六月十五日東京劇場で

泣きに來る妹、土産持つて來し　吉祥
枕許みやげの數をあらためる　民郎
故郷の土をばつけた土産物　富美三
團體で土産を値切る面白さ　山月
土産物子の手をそれるゴムバンド　子鬼
酒のみの酒呑みらしき土産物　方眠
デパートを一回廻る土産物　祥月
土産物底をたたいてあてゝみる　喜由
アメリカの土産は金をくれました　いわを
土産物少し氣張つた世話になり　一笑
土の儘土産にくれる里の芋　星城
磯の香の強い土産を手渡しに　ばつ天
土産物子にほどかして笑ろてゐる　沒食子
土産物旅の事ども話される　角丸
手土産はみんな子供へ渡される　詩郎

人相の鐘へ重たい土産物　幸捐
想ひが屆くやうな土産も探と見　三汀
土産々々男の子女の子　新市街
生活を見せまいとする土産物　三郎
お迎への手に土産物ほどかれる　水車
土産より無事に歸つたのがうれし　同
久々の歸郷土産を重く提げ　紅
吊皮へ土産の指が痛いなり　同
手土産がそろ〳〵話す金の事　同
迷惑な嵩に包んだ里の母　勝二

佳

お土産へ俺もお世辭を言ひすぎる　同
筍の土産玄關ひゞかせる　禿山
年寄の土産こま〴〵と分け　今雨
電燈の紐をのばして土産物　變人
土産見て得心をした茶を沸し　春光

七月例會

日本の名所名物に關する川柳を纏める前提として藤元の大大阪の「名所名物川柳を」一ヶ年計畫で本社の句會（一般からも）で募集することに致しました。佳句は畫家に依賴して「川柳漫畫」として發表す事に致しました。時代の何者かゞこれによつて殘せると思ひますので是非名句競吟のため是非々々御出席願ひます

日時　七月六日（木）午後七時
會場　道頓堀倶樂部（大阪市南區日本橋南詰東入南側、天牛書店　階上電話南二七四八番）
兼題　「大阪の夏祭り」　三句　麻生路郎選
會費　金三十錢

▼水谷鮎美君宅では六月七日夜盜難に襲られたそうです。實に御氣毒の至りです。
▼安西杏三君は多年本社編輯部同人で活躍をされてゐましたが、家事の都合上同人を退かれることになりました、一日も早く復活されることを祈ります。
▼岩垣日本村君は病氣のため退かれることになりました。一日も早く復活を祈ります。
▼福田鶴峰君は母堂の病氣で六月十八日夜郷里島根縣へ歸られました。一日も早く全快を祈ります。
▼清水虚白君は六月十五日突然腦溢血で永眠されました。哀悼の意を表します。
▼池田梨花女史は光耀抄作家でふるつてゐられましたが、六月十六日夜永眠されました。哀悼の意を表します。
▼川柳きやり吟社は東京市淺草區小島町七一、八十島杜若氏方へ移轉居されました。
▼本號の編輯は町二、琴人、丹路、山雨樓の諸君と私で致しました。

前號の正誤

六六頁もの言ひし如き故人の次の部屋　鮎美
春の庭故人の好きな花が咲き　同

肱・枕・艸・紙（七）

梅本塵山

【六十四】

現今、東京市中に流行する、飴賣の紙芝居といふものは、近頃出來たるものの如く思はるるが、江戸の末期にこれに類似せるもの有りし也。其れは芝居新狂言と稱する錢貫ひにて、横二尺縱一尺五寸許の木框の、周圍を厚紙にて貼り、其前面に二枚の扉を附け、木框の下に一本の棒を貫き、それを持ち歩きて、市中の家々の前に立ち、「へッ芝居新狂言」と云ひて前面の扉を左右に開き、内部の正面に貼りある二枚續きの俳優似顔の錦繪を看せて、而して錢を乞ふ也　されば今の紙芝居と、昔の芝居新狂言とは、切抜きの紙人形を踊らせると、たゞ似顔繪を看せるとの相違ある而已。

【六十五】

今の蝙蝠傘といふものは、慶應三年の其頃より、始めて使用されし由なるが、江戸時代には、夏日女の外出する時に、日傘といふものを差したり。此傘は實曆の頃より行はれて、青色の紙を張りたると緋紅色の紙を張りたると二種ありたるが雨天には使用するを得ず、文化の頃より紙に漆を塗りたる、兩天と稱する傘が行はれたり。此れは晴雨兼用なれば、甚便利なりとて、男女ともに使用したれど、町人には餘り用ひられず、武士醫者僧侶等に用ひられたり。亦十歲前後の少女は繪日傘を用ひたるが、此れは今も猶廢らず。大人用の日傘と雨天といふ傘は、明治十五六年より、蝙蝠傘に壓倒されて全く廢れたり。

【六十六】

太神樂の獅子舞は、丸一、丸大其外の數組ありて、大道藝人の一なり。其親方といふ者は、紋附の黑二羽重の小袖を着て白博多献上縞の帶を締め、腰に小脇差をさし、獅子舞、太鼓打、萬燈持、兩懸持等五六人の同勢を引連れて來り、演藝を所望する人ある時は、其家の前に萬燈を立て、一同其下に立並び、先づ親方が笛を吹きて、獅子を舞はさせ、其次に曲鞠曲撥、或は傘の上の茶碗廻し、雞卵廻し等を演じ、亦、檜物町のおかんさんとて親方がお龜の假面を着け、石榴袋とて赤き球の附きたる黑布を、假髪に代へて頭に被り、太鼓打を相手として、滑稽なる懸合噺を演ぜしが、それは何時も同しものなりし。最後に萬燈の櫻闕の糸を引き其れを四方に開かせて、紅提灯、造花などを顯はして看せたり。古くは伊勢大神宮の一萬度の御稈箱を、棒の先に括りて持來りしものなれど、後には行燈の如きものを、棒に附けて、其上に白幣と、御稈箱とを括りて持來りし故、世に誤りて萬燈と稱するに到れり。當時、黑小袖を着て白博多の帶を締る者を、太神樂の親方と渾名したり。太神樂の外に、獅子頭を被る者と、太鼓打と二三人にて來り、戸毎に錢を乞ふものを、一文獅子と稱へたり。角兵衛獅子は、亦別種のもの也。

【六十七】

角兵衛獅子は、越後の月形といふ地より出るものにて、その親方はみづから笛を吹き太鼓を叩き、而して小さき獅子頭を被り、筒袖の着物に裁附袴を穿きたる、小童二三人を引連れて來り、市中を歩きて、戸毎に立ちて錢を乞はず、所望する家の前にて、その藝を演ぜしが、親方が「まだいや〳〵」と聲をかけながら太鼓を叩き、淀の川瀬の水車、獅子の洞入り洞返り等を、小童に演じさせたるが、太神樂よりも古風に看られたり。後には戸毎に立ちて錢を乞ひしが明治の末頃より遂に來らずなりし。

【六十八】

江戸の末期に、判じ畫と稱するものが多く出版されたり。元祿の頃より、判じ畫はありたれど、其れと此れとは大いに異りて、現代の漫畫といふものに等しく、專ら世相を諷刺せるもの也。多くの中にも著名なるは、一勇齋國芳筆の、賴光の土蜘に惱まさるる圖なるが、これは發賣禁止の厄に逢ひたり　此圖は純粹の錦繪なれども、其外の判じ畫は彩色も甚粗末にて略筆のもの多く、筆者の署名も無きものなりし。明治時代に發行されし、新聞雜誌中のポンチ畫と稱するものは昔の判じ畫と同一なり。

【六十九】

德川幕府が崩壞して、明治政府が建設されし時、薩長土肥四藩の士が、諸官廳の吏員となりて民衆を看ること犬豚の如く虎の威を借る受附、門衛の如き者まで、やゝもすれば目を瞠り肩昂を張りて威嚇したるが、永く武士の壓制に馴れたる民衆は陽に不平も鳴らさゞれど、餘りに官權を濫用せる故に、速くも官尊民卑の不道理を呼ぶ者多く、續きて民權論者が擡頭したる也。而して明治の中葉より、官吏の民衆に對する言動は、やゝ穩和になりし。

【七十】

昔は劇場の音樂として、重要の位置を占めたる、富本節といふものは、其後、常盤津節、清元節等に、其位置を奪取されて、今は古典的三絃樂として、漸く餘喘を保つのみなれど、賞翫すべき點甚多く絶滅に歸するは惜む可し。哥澤節の端唄は、安政年間に獨立してより、江戸情趣の豐かなるものとて、都會人等に愛好されしが近頃、東京に小唄といふもの大いに流行して、夙くも數派あるが如し　端唄は優婉に過ぎて現代の人情に合致せざる點あり、小唄にはやや野卑なる點あり併し將來に於ては、端唄は小唄に壓倒さるるに到らむ。

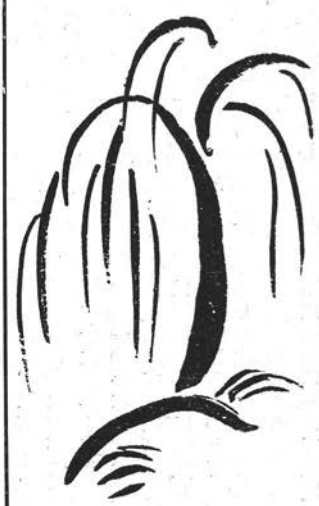
【七十一】

明治十四五年の頃までは俳句集などを木版に彫刻するに、其彫刻料は一句金一錢の割合にて出來たり、然るに近年に到りては、木版となす可き櫻材の缺乏と、職工の手間賃の騰貴とに由りて、木版は甚高價なるものとなれり。木版に人物畫を彫刻するに、職工の最苦心するは男女の髪の毛なるが、それよりも一層至難とするは、〇畫の〇毛なりと知己の木版彫刻師は語りたり。

【七十二】

瓦斯燈、電燈の皆無なりし昔は夜間外出する時に、各自提灯を携帶せるが、其提灯は身分に由りて、各その形を異にしたり。武士は手丸提灯、町人農夫は弓張提灯、職工は手長提灯を用ひ、町内を歩くにはぶら提灯、遠路を行くには小田原提灯を用ひたり。昔の女子は夜間に餘り外出せざりしが、偶々外出する時にはぶら提灯を携帶したり。箱提灯といふものは嫁入聟入の駕籠、大名旗本などの駕籠の前後を照すと、吉原の遊女の道中をする時と、嫖客を迎送する時にのみ使用されたるもの也。

各地柳壇



＝いのちあるる句を創れ＝

万よし君市議當選祝賀會

於道頓堀倶樂部

六月六日夜

本社六月例會は、同人庄萬よし氏の市議員再當選の祝賀句會として開催。先づ主幹路郎先生の挨拶に始まり、急霰の如き拍手に迎へられて庄萬よし氏立ち、包みきれぬ喜色を滿面に漲せて謝辭を述べ、尙今回の出馬による當選迄の苦戰談をユーモアーたつぷりに語りて降壇、次で琴人氏紹介によつて東京より來阪せし大野琴莊氏立ち、萬よし氏當選の喜びを述べ、現在川柳家にして市會議員の現職にあるは、恐らく大都會の現柳界に於ては川柳雜誌社同人たる氏一人のみならんと、大に關西柳壇の爲めに讃辭を呈し併て當夜の所感を述べて降壇、それより兼題席題の披講あり、終つて主幹路郎氏再び登壇此度本社より同人萬よし及客員藤本卯之助の兩氏を市會議員選擧裡へ送り出せし喜びを述べ。尙主幹自から大車輪に應援したる狀況を、例の鋭い川柳眼を以て捉え來り、之を巧みにユーモア化し、漫談的に語り出したが未だ應援演說の餘熱去らざる舌鋒は、得意の快辯に拍車を掛け當夜の來會者を、醉はしめ喜ばしめ、短夜の更けるも忘れて、恍惚たらしめたは、誠に初夏の風薰る夜に、ふさわしさ、句會風景であつた。(琴人記)

出席者

路郎先生、綠雨、禿山、山雨樓、豆秋、銀波、鶴峰、朴甫、靜太、紫石、華水、鮎美、紅、八步、琴莊、えいを、秋光、春光、雨少、小柳子、雅幽、葉平、角丸、南面子、かほる、眞太、踏幸、英郎、いわを、吉一、一羊、夢裡、閑路、柳次、水車、默平、あや美、文蝶、丹路、棹二、規堂、正夫、舟々、青踏、町二、楳太郎、萬よし、夕蹴、翠夢と(私)。

(追記)兼題(道頓堀)路郎選句は本文中に浸畫入りにて別項の如く發表したれば此處から句を除く。

席題　空　　琴人選

寢ころべば空の心になつてゐる　靜太
水たまりふと空の深さよ　冬光
空に畫くまづしき自我像　葉平
青空の圓味へ生きる朝の膳　文蝶
大空へ空想限りなくつゞき　秋光
心おほきく善人の空とゐる　鮎美
青空に何んにも云はぬ身の細り　禿山
惱ましい心を持つたまゝの空　銀波
空へ手を一べん受けて利休下駄　默平
會ひに行く空は嬉しいものにされ　八步
青い空踏んで看板出來上り　柳次
空青く紡績の笛野良に消え　規堂
襟垢のこの青空へ慘めなり　琴莊
心から友を迎へた空の色　舟々
青空へ敗けた姿の藥瓶　同
青空よ子子の唄妻のほがらかさ　棹二
星空へ吐息つめたく吸ひこまれ　同
(佳)空の青さが寂しさなる一人ぼち　町二
(同)五分間休憩空があるばかり　山雨樓
(同)たはれの愛大空が眼に泌みて　青踏
(軸)兒を抱けば喜ぶ兩手空へあけ　琴人
(同)輕氣球空へ記念日晴れてゐる　同

席題　副業　　綠雨選

水打つてから副業の店になり　文蝶
副業の漸く馴れた餡をこれ　夢裡
副業の手付きとなつて笑はれる　水車

制服のまゝで副業面白し　雅幽
副業の許可書は妻の名で届き　春光
副業へ何んにも言はぬ父とゐる　鮎美
副業が自分に合うて居るらしい　かほる
副業の埃りを拂ふ終風呂　紅
副業へ聲を落してゐる二人　水車
來客へ襖をしめる手内職　豆秋
副業へ兒供寢返りしたまんま　聞路
副業のせわしさ同僚へ義理をかき　角丸
副業へ爪がのびてるのを言はれ　山雨楼
副業を賞めて家主は晩に來る　紅

席題　眞劍　水車選

眞劍な養生法で死んでゐる　靜太
眞劍な願ひへ冷たく煙草の輪　秋光
眞劍な眼と眼微笑へとけて行き　棹二
眞劍な顏になるのを笑へない　舟々
子の病に眞劍の自己見出す　正夫
眞劍の曉ちかく水流れ　鮎美
眞劍の顏をゆつくり眺められ　文蝶
言ひ譯をする眞劍は疑ぐられ　琴人
眞劍な男ネクタイ歪んでる　華水
眞劍へ餘りに彼女明るすぎ　冬光
眞劍に嘘だ〳〵と振る兩手　默平
眞劍になつてペダルを強く踏み　琴莊
眞劍な瞳の中の風車　柳次
眞劍な男の鍵を信じきり　小柳子
眞劍は目鏡かけたり外したり　豆秋
眞劍になつて手付を置いて去に　同
眞劍な酒になつてる子の寢顏　八歩
眞劍な氣持待たれてゐる若さ　同
（軸）眞劍な筆のほ先がちびてゐる　水車

席頭　喜び　互選

ベビー服親も喜ぶ程の丈け　銀波
喜びのまゝに頭を下げてゐる　あや美
喜びへ母も一緒に寫される　角丸
喜びへ失業の父狹うゐる　秋光
喜びへ母は何度もお茶をのみ　春光
百燭に替へて喜びまだ足らず　聞路
喜びに裏から行けば使はれる　雅幽
喜びの足はとう〳〵走り出し　紅
喜んで死んでゆきます曼球沙華　葉平
喜びに行けば父の脊に隱くれ　春光
電話室でれば喜びの顏となり　英郎
喜びを訪へば朝から留守になり　柳次
喜びの花束にある好きな花　雨少
喜びの男拍手の中に立ち　華水

川柳雜誌社　**御池橋句會**（大阪）

六月十三日　村松夢裡報

兼題　流れ　かほる選

濁流へ戀文捨てゝ橋渡る　青兒
故郷を偲ぶ夜更けの流れ星　同
（軸）寅い灯が寫して流れごくなり　かほる

席題　お客　かほる選

お客から子供の數を問はれてる　いわを
來客の叔父は大阪中廻り　青兒
子供連れの客は心が落ち付かず　一羊

席題　簾　かほる選

簾かけて庭樹の影にお客あり　一羊
惡戲な子が簾から叱られる　青兒
ゆかしさを母家に見せた玉簾　夢裡
（軸サルマタの儘で簾を二枚つり　同

席題　風　互選

初夏の風はこまかく苗を搖り　一羊
別れる日北風強く吹いてゐた　いわを
白粉を濃くつけ乍ら風に馴れ　かほる
停電のしそうな風の音を聞き　同

席題　面白い　互選

面白く話す奧眼の男あり　いわを
面白い坊主毎日笑せる　青兒
微醉の漸く面白そうになり　夢裡
面白い話茶漬の箸を止め　かほる

川柳雜誌社　**鶴町句會**（大阪）

五月十日夜　妹尾變人報

兼題　待つ　かほる選

休憩所ハツと思へば逢ふ人　謙公
待たされて居る間に醉が廻りきり　豆秋
待つて居る影が夕日にながくのび　同
待つてゐた字をはれ上げる告知板　紅
加茂川の水に寫して待つ姿　雅幽
碁敵を待つてるやうな支那火鉢　同
表情に待つてた事を眉に見せ　夕鐘
心から待つてる人の汽車が見え　變人
いつまでも待つてますわ目をそらし　同

兼題　迷ふ　變人選

血歷の話藥にまた迷ひ　紅
決心のつかぬお寄席の角に立ち　岩石
迷ふ嫁のなみだ淋しくなつてきた　白峯
尋ねても迷ひ子アッチをさすばかり　謙公
（佳）迷ひゐる心押へて淋しがり　夕鐘
（同）迷ふたあげく手ブラで訪問し　豆秋
（同）十八九迷ふて居ても嬉しそう　雅幽

(同)輕氣球僕の迷ひへ流れてゐ　同
(同)春の宵同じ迷ひの君がくる　同
(軸)わづらひの悲しい事に迷ひこる　變人選

席題　銘仙　紅

銘仙で來て敎會の隅に居る　雅幽
銘仙の襟垢ふいて街へ出る　豆秋
銘仙の心しつかりしたむすめ　秃山
汚れたるまゝの銘仙春は逝く　變人
(佳)銘仙と着かへ氣樂な膳につき　かほる
(同)銘仙が親孝行の娘に似合ひ　變人
(軸)幸福は銘仙ですむ村むすめ　紅

席題　世辭　豆

世辭を言ひつゝ欠伸をしてた　岩石
芝居茶屋女將の世辭に送られる　謙公
(佳)珍客へ世辭の玉露ぎこぼし　紅
(同)眼鏡ふき〳〵お世辭は流れ　變人
(同)世辭一つ老眼鏡の顏さびし　白峯
(同)世辭云ふ俺よ俺を笑へるか　岩石

席題　寢不足　秃

寢不足を大きく搖するバッカード　豆秋
寢不足な顏で植木屋ひやかされ　雅幽
充血の眼に太陽のしみる朝　一笑
寢不足へ込入つた手紙持つてくる　夕鐘
寢不足の顏へネクタイしまりすぎ　紅
寢不足だやせただらうと腕を見せ　變人
寢不足の又前だれを踏んで立ち　かほる
(佳)寢不足の座ぶ二疊提げてくゝ　同
(軸)メンバーへ一人不足と叉呼ばれ　秃山

席題　ベット　雅

病室のベットへ世辭が少しすぎ　幽選
神經質ベットの向をかへて見る　紅
變人

れころべば風あり春のベットなり　白峯
ベットの深さも旅のもので　あり　夕鐘
(佳)お見舞に行けばベットへかしこま　白峯
(同)眠つてるベットに花をおいて去に　豆秋
(同)ベットが開けカーテン陽は弱し　一笑
(同)大欠伸ベットを降りる氣になれず　變人
(軸)色電氣ベットは猫とたわむれて　雅幽

席題　悪戯　互

いたづらが親父のあたまドげさせる　秃山
鼻黑うして悪戯の歸り道　夕鐘
悪戲に疲れた足で親を蹴り　雅幽
夕燒へ何處で悪戲してるのか　豆秋

席題　跡　互

傷跡へ小さい頃の話が出　豆秋
足跡を洗つては消す渚なり　富十雄
吾が家のあとをとゞむる菜の花よ　のぶな
跡を見る我が影ながら變る位置　秃山
足跡は右へまわりて電車道　白峯
身の者が殘つて跡をかたづける　雅幽
人間が歸つた跡の煙草の火　かほる

川柳雜誌社　**御旅句會**（十阪）

四月三十日　於森永キャンデーストアー

生田翠夢報

席題　脚　翠夢選

つゝじ咲く頃を二人の脚かるし　文蝶
人なりと思へば悲し馬の脚　正夫
脚冷える夜、待ちぼけの冷え　あや美
カブリツキ脚の動きに氣を取られ　比古
(客)脚の魅惑にカーテンの搖々春　琴人
(同)鮮魚跳れる漁夫の脚もと　紫石
(同)コンパスを長々見せた胸の帶　多耶
(同)泣き濡れて襟脚ばかり深く見せ　玄六
(同)脚撫でゝ今日のくらしを憶なり　同
(人)フットライトに魚腹踊る裸の脚　正夫
(地)脚くんで女給は今夜を約束し　比古
(天)脚の皺のばし延して父の風呂　紫石

席題　節　句　玄六選

（非常時の五月節句）

鐵冑、今年は一番幅を取り　紀太
白酒つがせご子無き春なり　比古
鯉のぼり皐月の風のほの青く　葉之助
（大阪の雜祭り）
奥に灯がはえて船場は宵節句　琴人
菖蒲湯へ三男四男揃つて來　同
（○氏の長男生る）
武具一つ磨き研いた節句なり　紫石
(軸)塗膳、埃も雛の二三日　玄六

兼題　冗　談　琴人選

冗談にしては淋しい言葉なる　翠夢
就職を御冗談でせうと言はれ　葉平
冗談を大空に向く鼻の孔　多耶
冗談も云へず二人は戀し合ひ　あや美
冗談に取れぬ言葉がひそんでゐ　紫石
冗談も少うし交ぜて金を借り　比古
冗談にして了ふ氣の高笑ひ　正夫
冗談に拔く軍刀の醉つてゐる　玄六
御冗談でせうと女横座り　同
(軸)冗談へ十七八の憤りやう　琴人

兼題　晩　春　路耶選

おけさ節、島の娘に春はたけ　即
三十才ふと花の散る樹を見上げ　正夫

(軸)運春か空氣枕もべちやんこだ　路耶
(同)晩春をたゞ寄り添ふた机です　同

川柳雜誌社　**塗青句會**（大阪）

四月十日夜　於紅居　熊谷紅報

空想

空想は嬉春のし野は青し　變人
幸福な空想を持つコンパクト　青踏
空想の女の顔の蒼白き　錦石
頑固から逃れて空想外へ出る　紅
北滿の小驛空想乘せて着き　同
空思の手にはビールの泡む飛び　錦石
空想のつぎ目コーヒを攪きまわし　青踏
病む母へもう空想の意地を捨て　紅
(軸)すばらしい空想へ今日も寢るさ　元山

戎橋

戎橋他人のやうに通つて居　光
空の色見る戎橋疲れて居　錦石
打ち明けてからを樂しい戎橋　變人
プログラムちぎつて廻る戎橋　青踏
此の次ぎの約束をする戎橋　同
戎橋女は心をきめて居る　錦石
戎橋言譯のいる人をつれ　光
いゝ氣嬢の先生に會ふ戎橋　元山
(人)空腹を抱えて戎橋を超え　變人
(地)戎橋ゆうべの醉がまだ殘り　青踏
(天)むかついた儘でとう〜戎橋　錦石
(軸)ふゝ欺す氣に成つて見た戎橋　紅

惱み

永遠の別離に惱む酸素壜　木馬選
結局は惱の增した草を見る　紅變人
惱みある人へ石段ながすぎる　變人
褒められて惱の重い未亡人　光
解けぬ惱みに續く酒酒　錦石

滿點

滿點と聞いた嫁にも此の不足　光
滿點を見せて淋しい父なし兒　紅
滿點と言ふ喜びに眠むられず　變人
(軸)滿點のきりようへ娘紅　錦石

退屈

退屈をした手枕がしびれて來　青踏選
(秀)退屈はズボンの折目立てゝ見ゝ　木馬
(軸)退屈な人へ座布團鐵がより　變人

兼題　電話

催促の口は電話につき當り　錦石
料理屋を呼ぶだけ電話第二號　紅
密る筈の雨に電話がかゝるなり　變人
話し中切れたへ荒い聲になり　木馬
借り電話華々しくも舖を聞け　錦石
緊張へ長距離らしいベルが鳴り　木馬
言ふ事の多い電話も里の母　元山
誘惑の電話へ迷ふ春の宵　光
(軸)名刺には自分の樣な電話なり　公選

兼題　競馬

事務的な暮し競馬も知らず居る　木馬
(軸)馬券買ふ錦紗の女脂切り　謙公

川柳雜誌社　**天王寺句會**（大阪）

六月十二日　於南面子居　福田鶴峰報

兼題　寺

救はれたゆかり樂しく寺を訪ひ　南面子選
寺をかこんで幸福そうな村　豆秋
雨のなか寺を合掌して行けり　鮎美

席題　朝顔

自慢して朝顔の苗一つくれ　豆秋
朝顔を數へさして子とゐる一と時　綠雨
朝顔をはつきりとみる日曜日　同

席題　旅

初夏の旅ゆかゝ百合の香になじみ　南面子選
(軸)草枕今日圓山に結ぶ夢はも　不平

席題　梅雨、上草履、紫陽花

けふもまた子等に座敷が狹い梅雨　鶴峰
先客のあつた溫みの上草履　詩郎
上草履はいて注射の番を待ち　裸人
紫陽花が咲きほこつてる雨續き　綠雨
紫の靄の降る日の紫陽花や　葉平
紫陽花にうす紫にふる雨や　同
梅雨の內去年の帽で濟ましとき　水車
上草履男が履いた型でぬげ　同
五月雨針が一本見つからぬ　豆秋
病院の廊下がすべる上草履　同

川柳雜誌社　**螢ケ池句會**（大阪）

六月十二日　石森靜太報

兼題　匂ふ

かやをつる看護婦たちの肌匂ふ　愚龍
香水の匂ひ看護婦さんの戀　露洲
髮をなでポマードの匂ひかいでゐゝ　同
故郷近く若葉の匂ふ馬車に搖れ　松雨
落書へ娘の肌が匂ふなり　靜太
安靜へバットの匂ひ友が來る　同
なにげなくよる處女の匂ひある　同
臨終へ白合が匂つて居たりけり　同

兼題　光

雲光り流る家鴨ないてる　靜太
六月の風光る少女らの美　同
光つても鳴つても降らぬ夏の宵　舟家
感激のない日の光りまぶし過ぎ　松雨
光らない銅貨机に並べてみ　同
踊り子はスポットライトの色になり　一馬
露草へ朝の陽ざしのよく光り　卷巴

兼題　夜　店

客絶えて夜店は露にぬれてゐる　登志男
ふつと出た夜店で植木買つて來る　愚寵
夜店の灯出れば星空澄んで居る　松雨
糊立つた浴衣夜店の灯をくぐり　松雨
買ふものがあり緣日の灯をあさり　卷巴
値切つても負けそうもない宵の口　舟家
風呂やから二人夜店をみてかへり　靜太

川柳雜誌社　東區人會（大阪）

五月十四日夜　於實樂會館　生田翠夢報

兼題　町　内　路　耶選

お向ひを眉に女房は強くなり　多耶
鴻池善右衛門と同じ町内　葉平
町内にすむそれだけの間柄　悟耶
町内の法被で如才ない男　白柳子
町内は肌見せて行くぬれタオル　八歩
町内の煙草屋だけが馴染なり　柳次
町内はこゝから違ふ撒水車　舟々
（軸）町内であそこ一軒金をため　路耶

兼題　藤　圓　角選

ふじ色のあわき戀とも思はれず　夕鐘
藤棚を日覆にすれば虫が落ち　多耶
（人）藤棚へ立つ母親もうすくぬり　八歩
（地）藤の棚ラムネの玉がまたつまり　柳次
（天）藤の棚女中は親に會ふところ　路耶
（軸）藤色の誘惑戀の齡ならず　圓角

席題　本　舟々選

思ひ出の繪本となりし嫁仕度　夕鐘
二三行讀んで古本次へ立ち　柳次
新刊の書に爽かな初夏の風　正夫
本讀めどわからぬ顏へ宵の風　紫石
少年の夢はてしなし本抱く　八歩
夜を更かす書物へ影の一ところ　同
本を忘れたピヤホールの晝　路耶
圓本推し春夏秋冬　同
灰皿へ遠し腹這ひ乍ら本　白柳子
樂書に故人の意氣を想ふ本　同
（軸）かび臭くあれど先代からの本　舟々

席題　パラソル　翠夢選

待たされてパラソル四十五度でる　あや美
無意識に置くパラソルの右左　白柳子
パラソルへレンズの心落ちつかず　柳次
ピーチパラソルの陰に死ぬでる人魚　正夫
パラソルが動くがまゝの男なり　多耶
パラソルの色にも濟まぬ待せかた　舟々
パラソルを廻して返事未だ出來ず　悟耶
（軸）パラソルも明朝として空著し　翠夢

川柳雜誌社　加茂川句會（京都）

六月十日（土）　於仲源寺　平岩司耶報

兼題　友　路　耶選

背丸くぶ吾友逢は金を蓄め　無冠王
潑溂と友は若さを夏帽子　琴人
寢轉んで友の抱負に雨止まず　昌一
友が來て僕の持論を覆す　悲虎
友情を金にする程苦しいか　流石
友情のさても氣掛り三原山　啓秀
新婚の友にこのごろ意見され　容山
デカンショで三羽烏が別れたり　雅幽
友逢だ友逢だとて金を借り　香朝
肩書を忘れ故郷の友と醉ひ　蛙里
友二人來て臺所あわてさせ　紫明
此の傷は君がつけたとちよくを受け　富美三
親友に實は娶つて欲しいなり　瓦之祐
（人）友が皆くさりが切れし如く散り　葉平
（地）友二人三人して妻をだます　雨山
（天）淋しければ歩いてくれる友なり　豊次
（軸）友逢、彼女東京は遙か　路耶

席題　愛　二山選

子と久々に夕餉の語らひ　迷兆
愛の巣の道具の足らぬ事もよし　紫明
愛人の乳房のふくらみ五月の陽　葉平
愛されて妾の不安去らぬなり　容山
打たれたる頬に父の愛を知る日　昌一
母の愛一針づゝに更る夜　佐一郎
ぬかるみを妻に知らせて眼が出會ひ　雨山
水にひろげた夕べの愛の限りなき　冠岐
愛熱つし切つて破局へ　啓秀
女らしい愛を向ひの兒に覺へ　陸平
愛してる男に椅子へ坐らされ　蜂耶
愛人のパラソルピンと空は晴れ　白扇
横顏へ默つて憂を感じてゐ　清堂
愛の言葉がとぎれた街の風　香朝

古びたる聖書に愛を感じたり　富美三
（佳）うつむいて強き男の愛をきく　草村
（同）愛に背いて冷たき闘志　迷兆
（同）愛されてゐると氣付で坂を降る　豊次
（同）愛人へ愛を忘れた宵にする　福造
（人）青空へ愛のないのが手を上ぐ　子鬼
（地）母親を眞中に愛人と往く　香朝
（天）愛されきつた女の鼾　清堂
（軸）リンゴむく手に愛の滴たる　二山

席題　罪　啓秀選

何の罪そ此の淋しさ　啓秀
瞳を伏せて罪をうなづく女なり　佐一郎
泣き伏した女へ心いがみそう　紫明
罪と知らずに白紙が送る　子鬼
罪をつくつて夏をすごさむ　光風
小さき罪に小さき胸を　櫻月
罪人の眼に復線が光るのみ　清堂
（人）罪なし罪あり生きる一路　同
（地）罪の女に乳の出ぬ夜　香朝
（天）罪なこと書く卷紙の白き夜　黄子郎

席題　制服　紫明選

制服のまゝカフエーの唄にゐる　雨山
ユニホーム青葉の驛で並ばされ　福造
制服に二十才の若さありはあり　光風
制服の立つた膝から詩集落ち　黄子朗
制服の少しはゞかるとこへ來る　櫻月
制服のチップは輕くつまみ出し　雅幽
制服の今日は實科の浸みをつけ　二山
制服の三人いつも氣が揃ひ　かほる
制服へ御所の青葉をぬけた風　たかれ
制服もさらば職業婦人となり　悟久
制服の定連らしいのみつぶり　六祥
制服のまゝ末席でかしこまり　治一郎
制服も破れマルクス讀みふけり　富美三
制服へ淋しい心俸給日　啓秀
制服は帽子を曲げて少し醉ひ　琴人
結婚を笑ひ制服机にゐ　香朝
制服の童貞と言ふひしが切れ　容山
（五）制服のまゝ泣いた純情　悲虎
（同）制服のひだが氣になる女學生　悟久
（同）制服を脱ぐと我家も廣いなり　清堂
（同）制服の上着を脱いで火ないこし　かほる
（同）制服の小さき遺族へ陽が當り　黄子朗
（人）制服が行李かついで歸つて來　富美三
（地）制服のカラーが固い朝を出る　悲虎
（天）制服のボタンが一つとれて梅雨　清堂
（軸）ほころびたまゝで制服今日も來　紫明
（同）制朝を女は二階から見つめ　同

席題　峠　かほる選

峠茶屋女の柄が干してあり　佐一郎
朝霧へまだ締めてある峠茶屋　櫻月
牛追ふて今日も峠のあか土に　冠岐
牛の背中峠を越すと丸うなり　折草
東京へ今日も娘が行く峠　豊次
峠茶屋乾ききつたるものを賣り　清堂
峠茶屋昨日の水がそのまんま　綠雨
峠茶屋清水を運ぶとこを見せ　福造
關体へラムネの足ぬ峠茶屋　紫明
峠茶屋元のひつそりかんとなり　同

席題　惜しむ　雅幽選

惜し氣なく髭を落して故郷の土　乃の字
夕やけに名殘惜むか兒は歌ひ　陸平
青春を惜む別れの南窓　冠岐
惜んでる樣に時間を見てくれて　福造
春惜しむ妻の若さも二十一　折草
惜しむ程散る花びらの淋しくて　琴人
若死を惜しまれてゐる曲り角　櫻月
惜しむ人ありて一輪ざしの花　六祥
惜春の眼に狂はしき雨と風　晃洲
事途ひに別れを惜しむハンカチフ　無冠王
別れ惜めば麥の上の月　葉平
腕惜まれて金貸してくれぬなり　啓秀
すばらしい嘘がうかんで負惜しみ　變人
我軍の樣に先輩惜むなり　容山
春惜しむ心を錢に嗤はれる　黄子朗
惜しむには足らない物へ妻の念　鼓城
（惑）離れては見たがころ〳〵惜しくな　琴人
（同）新聞の三面記事に名を惜しむ　晃洲
（同）指の骨ならして廿五をすごし　冠岐
（同）惜むらくはんなに惚れ辯を持ち　無冠王
（同）惜まれて退職手當ウンと來る　良之祐
（同）勇退を惜しみ若さを叱られる　容山
（同）惜しまれて家庭の事情話すなり　同

川柳雑誌社
神戸支部

部友句會（神戸）

六月二日　於華水居

兼題　更生　明球報　華水選

更生のちぎれそうな靴の紐　繁堂
更生の船首コヽアの國に向け　春秋
更生が奇麗に洗ふ仕舞風呂　幸捐
（人）更生の家を尋ねて來る女　同
（地）更生にまたぐぶ板を踏んで出る　明球
（天）更生へ沈澱物が見當らず　幸捐

席題　俺　明　珠選

ジヤズが馬鹿らしい俺の年　繁堂
溜息をついていつたい俺は馬鹿　吉左右
俺の目に入る女もゐるのなり　幸捐
犬よ俺はよつぱらいだ　春秋
君だけに云つて置くんだ俺の腹　華水
俺だけが知つてる事だ友に會ひ　同

席題　叱られる　春　秋選

叱られた事を云はない子が戻り　華水
叱られた二人になつて笑ふなり　明珠
汗ふいてゐる初年兵叱られる　同

席題　久しぶり　吉左右、幸捐　繁堂　共選

久し振りですね街の巾をとり　明球
久し振り間はれてにごすことだらけ　春秋
久し振り金歯が一つ殖えてゐる　華水
久濶へやつぱり僻があるのなり　同
久し振りビールぐらいでおまらず　吉左右

川柳雜誌社　**御旅句會**（大阪）

（春元紀太氏渡滿祝賀句會）

五月二十八日　於心齋橋心交社

席題　團扇　翠夢選

團扇と疊の間に、ひしげられた戀もゆ　葉平
濡縁に誰れか忘れた絹團扇　玄六
團扇の陰に半分ある笑顔　正夫
（秀）絹團扇　慈へもうと泣きに立ち　玄六
（同）絹團扇同志西瓜へ座り替へ　同
（人）母の顔ふと思ひ出す涼團扇　正夫
（地）團扇せか〳〵金借る話　紀太
（天）待たれて團扇の繪も見飽きたり　路郎

席題　日曜　圓角選

番臺で鋏を借りる日曜日　玄六
日曜は父もテニスの群れに居る　路郎
（共鳴）日曜をバスとソプラノ合ひ　玄六
（同）折角の日曜悔みに出かけ　路郎
（同）日曜のない生活に八つ手の葉　葉平
（同）日曜の父を放さぬ兒が一人　同

席題　三味線　玄六選

三味線ももう此頃は持つて來ず　圓角
膝まくら隣座敷の三味を聞き　あや美
三味線に何のうらみぞ秋の末　路郎
逢ふた夜の箱は邪見にほつとかれ　琴人
それとなく三味にまかした情氣なり　翠夢
三味がもう邪魔になる差向ひ　同
（佳）三味線がピンと響いた座の空氣　秃山
（同）合ひの手を一寸忘れる好きな仲　琴人
（同）爪彈のあの夜の雨に似た今夜　同
（同）日に薄れゆく君の愛三味を彈く　路郎
（同）名古屋胴二號になつて久しけれ　同

席題　出發　路郎選

出發へ唯手を握る手を握る　紫石
出發の間際に秘めた贈物　圓角
明日出發妻が揃へた附屬品　銀波
出發を汽車と聞くさへあわたゞし　秃山
滿洲は暑いですよと見送られ　紀太
トランクを閉めて出發時計を見　琴人
出發へ父の袴が長すぎる　玄六
奉公に出す角帶は母が締め　同
（人）出發のプロペラ朝の陽がまぶし　同
（地）出發へ社長の椅子が一つあき　いさむ
（天）出發はいつちしまに兒へ握手　琴人
（軸）みつ豆を挾み送られ送る人　路郎
（同）行李小さく當分は歸らない　同

兼題　道樂　琴人選

それとなく道樂の果を聞かされる　翠夢
道樂の親の遺品が賣れてゐる　多郎
弟に家督讓つて芦屋に居　玄六
道樂氣なしに先生口説いてる　圓角
道樂な息子の實つた家にくる　四ッ葉
きぬ〴〵の哀れ煙草の輪となりて　葉平
書はひろとて、女の匂ひ、酒の香よ　同
（佳）道樂を忘れ我家の植木鉢　玄六
（同）道樂のうちは入れぬ四書五經　路郎
（同）道樂な親の通りに道を行き　正夫
（同）道樂が無くて默殺されてゐる　同
（軸）潰すなら潰せお前にやつた家　琴人

兼題　爪　路郎選

爪の化粧をして御念佛　多郎
爪の垢今日も無事なる日を過し　紀太
ニコチンが爪に滲んで疲れてゐ　紫石
一廻り子をつんで親も爪をつみ　圓角
つれ〴〵な女は爪を切つて吳れ　翠夢
この人の生活に觸れるマニキユー　玄六
醉ひきらぬ夜を淋しく爪鋏　同
手を執れば爪にも鑑のある母ぞ　正夫
病む父の爪切れば初夏の光飛ぶ　同
（人）マニキアーこゝに女の生くる道　紀太
（地）佛性頑固な爪を膝におき　琴人
（天）職業を爪にあらはし露路に住み　いさむ
（軸）道具屋が通れば爪を切つてゐる　路郎

川柳雑誌社 八束句會（島根）

六月五日　天痴人報

兼題　田打ち　槇　椰選

打ち終へて俺の田でない寂しい心　亂笑
田打する鍬の刃先に陽が切れる　同
働かれば食へぬ力で田打する　天痴人
田打ちする足へ鰌が腹を見せ　巻二
（秀）田打つ手を休めば現實寂し　茜草女
（同）田打着に似合ふ煙管の父となり　柳人
（同）默々と田打ちの父子に黄昏れる　亂笑
兼題　ヴェランダ　六郎選
ヴェランダの愚痴日本は蚊が多し　天痴人
丘の別荘のベランダが青い　莞路
ヴェランダに囁きかけた明星よ　巻二
本能を默殺してる夜のベランダ　茜草女
（秀）プルの虚榮心ベランダが貧弱だ　青波
兼題　苺　天痴人選
苺の味覺に青空が溶ける　柳人
（秀）讃美歌が洩れる小庭に洋苺　莞路
（同）夕立にぬれて苺は初夏の色　亂笑
（同）生ビール苺の色と共に來る　巻二
（同）生活の果てに苺が腐つてる　六郎
（軸）園藝場餘技の如くに苺熟れ　天痴人
席題　蚊帳　柳人選
意氣地なき俺が寂しい蚊帳の中　莞路
隅つこに蚊帳めくられて朝が來る　六郎
蚊帳裾に風が縺れて日曜日　槇椰
（秀）蚊帳吊ればほんとに狹い家なり　巻二
（同）蚊帳あかく青く朝が疲れてる　六郎
同）添ひ乳は足がはみ出る枕蚊帳　茜草女
席題　戰術　巻二選
君！戀は戰術があるんだよ　六郎
戰術は女を煙にまいてゐる　祥月
賣る戀の技巧口紅ぬつてゐる　柳人
退却も戰術ですと支那の兵　亂笑
席題　豚　青波、莞路兵選
メーデーだ豚にもうんと喰してやる　莞路
豚小屋のあたりは暗い夏の月　巻二
豚の戀隣の壁を嚙んでみる　勁一郎
豚、如く肥えてマダムに子が無くて　槇椰
豚肉とにんにく滿洲に住み馴れし　柳人
日を浴びて意識ののろい豚歩む　青波

川柳雑誌社 高知句會（高知）

五月二十一日　於ブラジル樓　中澤濁水報

席題　初夏　春水選
新婚のボートをなぶる初夏の風　濁水
職人の片袖ぬいで初夏が來る　六絃
新緑に病舍の窓の陽が甘い　青果
店へ出る苺に初夏の匂ひする　無蓋
（五客）初夏の風細民街に見るゆとり　青果
斷髪の女へ初夏のアスハルト　松聲
初夏の吸呼を街路樹してくれる　龍尾
（人、浴衣地の陳列初夏の氣をそゝり　紫白
（地）お隣の話が近い初夏の窓　六絃
（天）初夏の陽へ女眩しい物を干し　松聲
かん〳〵の先走つてる大通　濁水
（軸）初夏の陽へアイスケキの瓶の數　同
席題　雑巾　桂風選
雑巾へふつと淋しい孤獨感　六絃
雑巾の數を週番讀みちがへ　映珠
雑巾へ遠足樂しかつたこと　同
雑巾へ辛さ詫してひざまづき　春夫
雑巾へ廻るタオルの字が哀れ　青果
雑巾に嬉しい戀を折つて拭き　濁水
雑巾へ今朝も歪んでゆく心　龍尾
（軸）雑巾の柵にあの子の齡を繰り　映珠
席題　良心　龍尾選
嘘ついて出た盛場で下駄が切れ　十歩
善惡をわきまへて出る春の宵　桂風
裏切つた夜を冷めたい夜具の襟　松聲
良心に叛く財布の口が開き　春夫
冗談へ對手思はぬ周章てやう　紫白
良心に引きもどされた戰慄　松聲
良心をふと覗かれた出納器　濁水
良心をコーヒの中にふと見つけ　六絃
良心に優越感をけなされる　青果
（軸）良心へ亭主とぼけて見せる　同
兼題　斷食　青果選
斷食の日記体重だけを書き　珍景
斷食の捨てゝ置けない社長室　六絃
斷食へちときつすぎる寺の鐘　松聲
斷食に信仰強い脈が搏ち　龍尾
胃の方へ挨拶もせず食を斷ち　春水
斷食は木魚に弱る手を感じ　濁水
（軸）食斷つて一擧に癒す胃の病氣

川柳雑誌社 加古川吟社例會（兵庫）

五月五日夕　於光哉居

兼題　恩、蟻、諦め、帽子
恩に被て大きい膝へ頭さげ　光哉

先代の恩義へ母の堅苦し　泰山
伸びる新芽を刈りし恩義よ　美也光
かさみ行く恩義に腰のおどけてゐ　督二
蟻の倉蟻の死骸も混つてゐ　光哉
重いものかついだ蟻に夏を知り　泰山
蟻見つゝするともなしの日向ぼこ　美也光
蟻の行列へ午後の陽だろう照る　同
一瞬に崩るゝ塔と蟻知らず　督二
母のうしろ姿へ僕は諦めやう　光哉
ウキンドに到底買へぬ美しさ　同
諦めて兒と二人ゐる賃仕事　泰山
諦めへまた再縁をすゝめられ　同
酒よこの諦めたのを慰めろ　美也光
孝行の一つだ俺は諦めよう　同
駄目だつた帽子小暗くそこへぬぎ　光哉
買つて來た帽子の乘らぬ子のあたま　同
かむつてる帽子の柄でことわられ　泰山
先代の山高で來る素封家　同
寢てるのへ買つた帽子を當て見る　美也光
腹立てゝ歸れば帽子忘れてゐ　同
夏帽になつてポケツが輕過ぎる　督二

川柳雜誌社　**西條句會**（愛媛）

五月十三日　於支部事務所　英賀夫報

席題　セル　互選

セル出せば去年の酒の泌みがあり　村雨
家出した娘はセルのまゝであり　英賀夫
略式はセルの袴ですましとき　古舟
奥さんのセルを貰ふた下女の春　虹一
席題　戀敵　村雨選

戀敵氣障な男にされて居り　狂波
戀敵女に持てる趣味があり　虹一
（秀）沈默の中に戰ふ戀敵　義郎
（同）さて勝つて見たが淋しい戀敵　英賀夫
（軸）戀敵自信ありげな微笑を　舟選
席題　アスファルト　古義郎
アスファルトの上で拾つた戀であり　孤鶴
繪日傘が横町へ消へアスファルト　英賀夫
アスハルト春の素足のなまぬくし
（軸）アスファルト盡きた所に驛があり　鶴選
席題　鯉　幟　孤鶴
我も折れて祝つてやつた鯉幟　狂波
鯉幟りハシカの子供へ窓をあけ　英賀夫
席題　庭　石　英賀夫選
庭石の自慢へお茶もくんでくれ　古舟
庭石のこけの古さへ趣味があり　虹一
（軸）庭石の此處まで下女はゆるされる

川柳雜誌社　**松江句會**（松江）

六月一日夜　於天神境内ミドリ喫茶店

（奈良井柳人報）　廣江天痴人選

兼題　非常線

（）ルームライト氣付らしく暗くなり　檳榔
（同）非常線そのトランクに用がある　六郎
（同）非常線新聞記者がうるさいな　柳人
關税高く〜〜ブルの非常線（軸吟）
兼題　螢　梶谷巷二選

童心に皈つて螢追つてゐる　磨須雄
螢籠だけをぶら〜〜持ち歸り　鬼面人
狂しい心に冴へるほたる籠　赤陽
掌の中で螢は死んで兒はかへり　檳榔
燒酎か今日も呑めない螢賣り　砂詩朗
螢籠淋しい夜だナー月が青いよ　柳人
曲線の光を描き螢逃げ　玲人
螢の光に以た俺の決心よ　莞路
席題　齒磨　目黑大鳥選

齒磨紛胸へこぼして返事する　天痴人
齒磨に貧民窟も朝となり　玲人
齒磨を仲間で使ふ二階借り　莞路
新綠の今朝齒磨にプラン立て　同
齒磨の心地に朝がよみがへる　柳人
（秀）齒を磨く氣持に朝が溶けて　六郎
（同）露の香も嬉しい朝の齒を磨き　青波
（秀）齒磨に氣儘な心恥づかしい　柳人
席題　喫茶店　古割砂詩朗選

喫茶店謎の主人がよく笑ひ　漏五郎
廣告の角度に沿ふて喫茶店　柳人
喫茶店西條八十の好きな人　巷二
席題　鯉のぼり　松本六郎選

母の瞳に嬉しくうつる鯉のぼり　祥月
新日本我らが意氣よ鯉のぼり　磨須雄
男性の意氣だ力だ鯉のぼり　同
鯉のぼり無風へすれた樣にたれ　漏五郎
青空の自由に媚びて鯉のぼり　柳人
童心に歸る心の鯉のぼり　赤陽
鯉のぼりみどりの風を吸つて跳ね　天痴人
青空を大きくけつて鯉のぼり　巷二
席題　卒直　岡崎祥月選

卒直に云へぬ娘の戀心　鬼面人
卒直に云へばお金がありません　巷二
卒直な人で兵際皈つて來　大鳥
愛人のその卒直を持て餘し　同
卒直な答女敎師うれしがり　天痴人

席題　卒　直　　長岡鐵花人選

卒直に云へないことがあるらしい　莞路
卒直な意見幹事を困らせる　天痴人
卒直な男でやはり戀をする　赤陽

川柳雜誌社　**松山句會**（松山）

六月十日　於喜峰居　河合紫石報

兼題　解　消　　五　健選

解消は女に一理ある話　喜峰
解消の熱語へ頭古すぎる　大樓
（秀）解消をすれば互に有る秘密　一紫
（同）萬事皆解消したく成る不運　大樓
（同）藝者今日過去を解消して嫁ぎ　紫石
（軸）解消のもつれへ記者の派手な筆　同
（同）要するに犬も食はない解消さ　峰選

兼題　夏の空　　喜　紫石　麥舟　五　健

ルンペンの姿へきつい夏の空
炎天を見上げて男水を吸み
夏空も緑りも映つる金魚玉
（軸）晝寢から覺めて仰げば雲の峰

兼題　金　庫　　紫　石選

談判の後の方に大金庫　喜峰
大金庫悠々あけて端した金　大樓
信用と共に金庫の古びてる　一紫
先代の型で金庫の前に座し　素泉
金庫の鍵もまかされ禿げてゐる　喜峰
信用は金庫の太さ程になし　拓水
手遊びの樣に金庫の符をまわし　五健
（軸）金庫と背に白痴の子を育て　麥舟選
席題　斷　然　　柳女

子まである仲と斷然清算し
斷然惚れたと少し醉ふてゐる　春峯
言いすぎた女給斷然ウソにする　紫石

席題　白　粉　　互　選

白粉の事も志れた共稼ぎ　喜峰
そばへ來た子にも一はけ若い母　春峰
稽古三味白粉燒けの母があり　五健
塗れるだけ塗つて舞妓は宵を出る　紫石
白粉の濃さも淋しい嫁き後れ　春峰

川柳雜誌社　**簸川句會**大地吟社（出雲）

六月十日夜　於尼綠之助居　尼綠之助報

兼題　汗　　綠之助選

馬の汗流してやれば首を垂れ　田鶴緒
玉の汗拭き〳〵晴衣座り飽き　孤舟
もう一足ぐすと車夫汗を拭き　數馬
汗ばんだ肌に蟬の鳴きつゞき　數馬
汗何時か體臭となり日は落ちる　比紗緒
（佳）この汗に滿足してゐる監督よ　數馬
（同）肌の汗子は無頓着な乳を吸ふ　海月
（同）彼女の汗が夏の風を弄ぶ脚　萬綠

席題　更　衣　　田鶴緒選

（佳）童心は明日の更衣が待ち切れ　比紗緒
（同）若やぐ心着替えた宵の星空よ　綠之助
席題　妻　楊　子　　萬　綠選

横を向く女みだらに妻楊子　綠之助
妻楊子愛人の名のみ書けてゐる　草路
妻楊子ポキリと折つて諦める　綠之助

カラス吟社句報（出雲）

三月十五日　於銀行　鴉　天　報

題　のんき、手、春雜、犬、馭

軍港の春肩組む水兵の口笛　汀雨
犬の遠音たゞそれだけの夜　同
のんき者ふところ手してどこへ行く　一可
春とははかない戀の思ひ出よ　同
のんきさを不安がられて家を持ち　允江
藥つぐ手へ靜脈のはつきりと　泡鳴
シツカリと歇ほうよ鄕土の節を　同
ヂツと手を見つめ非常時にある決意　水煙
蠅が角力とる春の炬燵　同
ハイヒールの音輕るやかに春の宵　鴉水
夜遊びの遠くに犬の聲ときゝ　丸男
濱に唄へば漁火動く夏の濱　同

水煙送別句會（出雲）

三月二十三日　於石原亭　鴉　天　報

題　思ひ出、去る、女優、小使

思ひ出のない人生を歩んでた　泡鳴
言ひ切つて去り行く影へ淡い月　同
雨の夜へ親子悲しい思ひ出よ　章泉
思ひ出が胸一杯になつて來た　同
數々の思ひ出秘めて故鄕を去り　一可
女優の寫眞が机の前に笑つてる　同
友去つた後淋しくてゴロリ寢る　汀雨
言ふ事は言つて男は去つて行き　水煙
小使の青空へ小さき我を見る　同

川柳雜誌社　**ABC吟社例會**（島根）

五月八日夜　於檳榔居　八東支部報

兼題　妹　　六　郎選

妹は默して罪をわびてゐる　青波
妹も胸の線から女めき　莞路
愚痴一つ言はぬ妹え婚期過き　茜草女
宿帳にいつそ妹にしてしまひ　卷二

桃色の夢か妹の繪封筒　莞路
妹の氣質に惱む母やつれ　青波
(人)妹にすまない兄となつて寢る　檳榔
(地)妹の闘志嬉しくきゝゐたり　柳人
(天)妹と位牌の前を並ぶなり　まさを

兼題　新鮮　檳榔選

新鮮な村の娘の健康美　莞路
(地)すがすがしい山の大氣へ斧の音　亂笑
(天)煙突を出る掃除夫に風青し　まさを

席題　ガラス　柳人選

君の嘘ガラスの中の泡に似て　莞路
すり硝子部屋は朗らな笑聲　祥月
闘藥を盛るギヤマンに灯が映ゆる　まさを
ガラスみな鋭く光る手衛室　檳榔
都會の片隅のガラス碎ける　まさを
(人)十重二十重のガラスに戀だくらう　六郎
(地)畫行けばカフエー硝子拭くなり　卷二
(天)帶の恰好を硝子に映し待つ女　檳榔

席題　表情　まさを選

お姜になつて無表情の顔でゐる　卷二
悲しさをこらへて暗ひ臺所　亂笑
泣いた子の顔へ夕陽が濡れて落ち　六郎
帝國の危機燒栗の表情だ　柳人
啞い子の寂しき瞳が唯怨む　柳人
晩酌に父の微笑がうれしいよ　卷二
表情を閲タクの助手見のがさず　檳榔
諦めた顔が眼鏡を拭いてゐる　檳榔

二選

席題　飛躍　卷

朝の畑土の香りが飛躍する　青波
眞黑になれと飛躍の夏がくる　檳榔
ブラジルに建てん鳥根の樂土境　柳人
飛躍せん君よ頭を刈り給へ　六郎
國境を越えて飛躍の女たち　柳人

席風　明　祥月選

地下室で獵奇的なる灯の明さ　卷二
明朗な五月の空が瞰りたい　檳榔
ステップの肢線に匂ふ明るさや　まさを
東れ髮明るい夢は過去のこと　卷二
燈明にまだ佛心になり切れず　まさを
燈明に鳴らす父の手細かりき　柳人
アパートの明るさ女の唄ふ聲　卷二
山院は夜明けを氣づく鬼瓦　まさを
閑人の夜が明けやうが更けやうが　六郎
呼鈴へ明るき返事處女の聲　同
明るみへ出るまで續く流行歌　卷二
明朗な瞳に映るアンテナよ　柳人

席題　明　亂笑選

明暗の女人生の眉を引く　柳人
ハンカチを派手に明るい笑聲　卷二
プラタナスと五月の空は明朗だ　柳人
明月へ羞ちらひもなき鬼瓦　まさを
(人)明々電燈石に個性の影が出來　青波
(地)明確な答へとなつて來た空房　まさを
(天)明晰な君の闘志がうれしいぞ　柳人

川柳雜誌社松江支部　川柳會聯合句會(松江)
いかだ

五月廿一日夜　於いかだ會事務所

席題　獨占　廣江天痴人選

愛の獨占新世帶の朗らかさ　梟人
飯臺を一人でとつて男の子　檳榔
俺一人のものになれよ白い手よ　莞路
(人)逆境に貧を獨占せし腕　柳人
(地)獨占をたくらむ薔薇の花束だ　都之介
(天)表紙から續く主幹の一頁　卷二

席題　マドロス　奈良井柳人選

若いマドロスマストの帆桁で踊つて　梟人
SOSマドロスゲツと決めた腹　六郎
マドロスのセーラーパンツに春の風　亂笑
マドロスの戀も二度目の上陸だ　祥月
(秀)マドロスの足が亂れ夜が更ける　檳榔
(同)マドロスの靴が踊つて上陸だ　卷二
(同)マドロスに藻のさゝくれが淋しい　都之介

席題　朝　田中都之介選

芍藥の白さに朝がこぼれそう　天痴人
貧しき生活に番茶の朝よ　六郎
朝露に光るものあり新開地　卷二

席題　朝　遠藤檳榔選

ぼろぎれの樣な失意の朝の雲　都之介
朝風へ胡瓜の蔓がもつれたり　同
白き朝心にかゝる雲一つ　同

席題　妻楊子　梶谷卷二選

暇な日の指にふれたる妻楊子　柳人
妻楊子神經質な音で折れ　天痴人
妻楊子ヒステルカルになつてゐる　都之介
(秀)妻楊子昨夜い夢を追ふてゐる　同
(同)工場のひるを汚れた妻楊子　柳人
(同)決心がぽきりと折つた妻楊子　天痴人

席題　妻楊子　松本六郎選

妻楊子くわえて畫の賣春婦　柳人
(秀)妻楊子に遠景がゆがむ　都之介
(同)暇な日の指に觸れたる妻楊子　柳人
(同)妻楊子ヒステルカルになつてゐる　都之介

席題　解　剖　　大石赤陽選

動かない蠅一匹解剖室の晝　亂　笑
生白いメスが鮮血を吸ひつける　檳　榔
　　岡崎祥月選
席題　解　剖　　巻　二
解剖に博士の目鏡澄んでゐる　天痴人
解剖室血液生きてゐるごとし　同
斷ち割つて見れば きれいな腸だ　同

阪大川柳會（大阪）

五月二十四日　　丸島利生報

兼題　人　目　路　耶選

人目から離て男口を切り　友　正
人の目を背なかに感じ室を出る　利　生
花道ははでに人目を忍んでゐ　路　生
すましてゐれど人目にそれと知れ　同
憚らず女は強く寄り添ひぬ　方　正
友人の目をのがれんと目深にき　山　彦
人目ありせめてお經の一つでも　一　杯
人目人目怖るゝ如く通り過ぎ　筑　川
顏がさすとかく彼女は軒を行き　山　彦
人目さへひけば足る氣の虛榮心　柳　秀

梅川忠兵衛を思ふ

人目避け外はしぐるゝ三輪の茶屋　氷　炭
(人)名がうれて氣やすく昔戀しがり　山　彦
(地)夜逃げ人とは知らず義理を立て　正　甫
(天)心得て勝手口から出して呉れ　芳　一

兼題　賣　店　路　耶選

賣店はお金を替へるとてちやない　楽
賣店が並んで二見明けて來る　正　甫
發車迄十分あると賣子いひ　山　彦
賣店の女の指に敎へられ　氷　炭
賣店で先づ移轉先尋ねて見　筑　川
みやげ店百舌鳥のやうながつまとび　同
賣　の時計のぞいたふりをして　きよし
賣店の時計きつしり驛と合ひ　楽
都ぶりうらやましげに見る賣子　柳　秀
學校を出て賣店に座らされ　山　彦
商品のやうに賣子も並べられ　方　正
賣店に廻り行燈のかゝる夜や　利　生
團体に賣子のぼせた顏を拭き　氷　炭
積み上げて吊して賣店まだ足らず　柳　秀
土産店呼ばれぬ方へ立ち止まり　利　生
(人)賣店の地階を出れば夏の日だ　芳　一
(地)名産を列べて秋の日が暮るゝ　路　生
(天)地下室の賣店世帶染みてゐる　一　杯

雜　吟　路　耶選

椽の下今にお掃除する積り　方　正
笛賣りが吹いた樣には鳴らざりし　芳　一
一萬圓ショウウインドに光つてる　一　杯
はい〳〵と云ふてはゐるが自尊心　利　生
店番はギャングの記事を寒う見る　柳　秀
今日のこと思ひ返して茶碗持ち　氷　炭
手切金出しては見たがまだきれず　きよし
ではあるがやはり心は割り切れず　芳　一
昔きた舞の衣裳をなでゝ見る　山　彦

席題　糶　賣　路　耶選

糶上げてあついてこゐたよりなし　楽
糶市で買ふた品だが捨てられず　方　正
糶賣の聲に餘韻の無くてよし　同
糶賣で揃へ正月らしくなり　きよし
糶賣によういはんわの顏をよる　湧　三
ズロースを大きく擴げて糶つてゐる　同
夕涼み輕く糶りへと足を向け　筑　川
糶り賣りにふと立寄つてすりに合ひ　同
すた呉れる樣にせり賣負けちまい　路　生
まあ見て見なはれと糶賣屋汗をふき　同
糶上げていつちしまゐに析を入れる　同
不圖糶つてつまらぬ意氣が買つちまい　山　彦
泳いでる樣な手つきでシャツをせり　同
糶賣や損は承知のやうに云ひ　柳　秀
糶賣を女房に見せて笑はれる　同
疵のない證據糶賣灯にすかし　同
茶碗賣りまけてやらうと藁を投げ　きよし
糶賣屋物の強さを見せてから　氷　炭
糶賣屋の隣りは虫を賣つてゐる　同
糶賣屋賣上げそこへ出しておき　同
糶賣に買ひはぐれたる瓜長し　同
疳たてゝる樣に糶賣たゝいてる　利　生
糶賣を遠く眺める二人連　同
糶賣にかけてもみたい子澤山　同
糶賣の茶碗の音も春の宵　同
ぼろくそにこふて糶賣たゝくれず　同
(人)糶賣は喧嘩のやうな人だかり　同
(地)糶賣屋害にはならぬ瑕を見せ　楽
(天)糶賣を初手から見てる懷手　柳　秀
(軸)兵兒帶の端をかんだサクラの手　路　耶
(同)糶賣屋そんならさいふシャツを出し　同

明珠居小集（神戸）

五月二十七日　　明　珠　報

兼題　女　春　秋選

まづしさに馴れた女の肩がおち　芳　弘
妹の匂ひが消へぬハンカチーフ　同

(人)三十女が鏡の中で生きてゐる　彌之助
(人)孫の手をさう〳〵賴よるおばあさん　明珠
(地)はにかんでゐると女にからかわれ　同
(天)洗濯をするお天氣を女待ち　同
(軸)男のあぐらへ女の坐りやう　春秋

兼題　青　空　明　珠選

青空の下に物憂く生きてゐる　隨々
青空がうらめしい程病んでゐる　彌之助
青空へ金に泣く日があり男　麥刀子
青空へ流浪のはての旅藝人　芳弘
切れ話空の青さへ言ひしぶり　同
(佳)青空をみつめ故郷のない男　同
(同)逝く春の空の青さ不具を泣き　麥刀子

席題　信じる　麥刀子選

信じてる女疑ふ春の雨　彌之助
何も云はぬ母へ心で詫びてゐる　高雄
共稼ぎ二階を借りて信じ合ひ　春秋
純情の固く信じて田舍にゐ　同
(人)信用がまだあり米屋來てくれる　芳弘
(地)友情を信じてからは夢もなし　明珠
(天)醉ふてゐる顏は車掌を信じきり　芳弘

席題　土曜の夜　互選

はんどんの宵なりまろい心して　麥刀子
聯珠など見ておそなつた土曜の夜　明珠
大の字になつてれて居た土曜の夜　彌之助
折角の日曜一日醉で居る　高雄
心ゆくまで遊んで見るも土曜の夜　同
土曜の夜裏の社宅は謠なり　春秋
土曜の夜二十錢ではしようがなし　同

席題　鯉のぼり　清記互選

鯉のぼりこの家の生活ふとおもひ　芳弘
不景氣と別に五月の鯉をあげ　同

席題　戀、色、數　互選

クレオンの茶色で畠出來上り　芳弘
親一人子一人春を淋しくゐ　彌之助
戀といふ字を書いて消す若盛り　明珠

川柳雜誌社

九三會（大阪）

六月十日　北山悟郎宅　明石柳次報

席題　鏡　舟々選

あゝ白日、鏡の中の乳房哉　葉平
ゆううつでゐるに鏡の光りやう　一雄
約束の時間迫つてゐて鏡　聞路
姿見はます〳〵白く待たされる　豆秋
店鏡背中の方でからかはれ　同
(軸)眞先に鏡を見せてくれと云ふ　琴人選

席題　櫻んぼ　琴

櫻んぼローマンチックなものにされ　光男
戀人の顏をまともに櫻んぼ　聞路
櫻んぼ互ひに若い氣になつて　舟々
あまづゝぱき櫻ん坊にちるビール　葉平
いゝ人が來て櫻んぼほつとかれ　豆秋
櫻んぼビールの泡へおどけたり　柳次
櫻んぼビールのつまゝれる　綠雨
櫻んぼバケツの水に並ぶなり　同
(軸)櫻んぼ友とビールのはづむ卓　琴人選

席題　痴　人　葉平選

痴人の夢白き永き日か　柳樂
痴夢を說く桃色の夜中　舟々
ものうき痴人うつゝなる朝を起き　琴人
(軸)痴人の夢の果てしなし夢　聞路選

席題　夕　燒

夕燒を留守番二階の窓に見る　普天
夕燒ける田圃に牛とたゞ一人　豆秋
夕燒に機嫌直した子が一人　光勇
夕燒へよみがへる純情よ　一雄
バスの埃に夕燒を見る　綠雨
夕陽あか〳〵會社あとにする　柳次
夕燒で泣くに泣かれぬ一人居の　葉平
思ひ出の夕燒子供抱いて出る　舟々
(軸)夕燒に喧嘩が一つ淀川區　綠雨選

兼題　蝸　牛

梅雨空にのび切つてゐる蝸牛　柳次
蝸牛は子供は手から角を出し　琴人
童心にかへれる箸の蝸牛　鮎美
蝸牛だけが知つてる明日の雨　規堂
蝸牛おちついておれぬ風となり　夕鐘
(佳)蝸牛あまりに澄んだ空であり　一雄
(同)蝸牛そろりそろりと參らうか　葉平
(軸)蝸牛だん〳〵枝がさがつて來

紀北句會（和歌山）

六月十日　立石百文報

第一回を午後五時より九度山善名稱院（眞田幸村古跡）に於て擧行致しました。

兼題　參詣　福田山雨樓選

氣の弱さ參詣道で買はされる　竹石
柏手もさえて世々木の朝まだき　夏曉
流行唄唄つて登る參詣道　百文
道連に亡き子を賞る寺詣り　總太郎
神樣もあてられている若夫婦　しげる
(人カジカの音淋しく詣す一周忌　幸次郎

(地)遠くから投げた寒錢よく響き　不美男
(天)參詣に苦勞しぬいた顏ばかり　一杉　山雨樓
(軸)參詣は眺めになつて汗をふき
兼題　晩酌　福田山雨樓選
晩酌に今朝釣て來た膳の鮒　柳帆
小供にも一寸飲ませる醉心地　不美男
チヤブ臺も銚子が乘つて形になり　天保錢
孫もつて來る晩酌へいゝ機嫌　總太郎
卷舌になる晩酌を持て餘し　夏曉
晩酌の膝へ寢入つた子のまつ毛　同
晩酌へ妻は眞面目に聞いて居ず　竹石
(人)久かたの姉晩酌を一とつ受け　柳帆
(地)晩酌のあとの一本飯にされ　百文
(天)里からの鮎で晩酌ちとすごし　竹石
(軸)晩酌へ月の丸さを言ひに來る　山雨樓
席題　蓄音器　夏曉　選
一と通りレコード掛けて物足ず　柳帆
蓄音器買へばボーナス消えにけり　しげを
蓄音器身の入る處で止んで居り　百文
島の娘ゐ蓄音器屋の惜氣なし　一杉
蓄音器母は離れて縫つてゐる　山雨樓
(軸)聽く耳を持たぬレコードはかしく
席題　つばめ　一杉　選
三面の若き燕は笑つてゐ　壽郎
作業と同じつばめが來るかしら　柳帆
つばくらめ川の光へ身をかはし　山雨樓
(人)つばめコンクリートの法を知り　幸次郎
(地)俄立ちつばめの宿る軒を出る　夏曉
(天)姉妹も母も田にゐるつばくらめ　山雨樓
席題　母　互　選
級長の母隅にゐる父兄會　山雨樓

子の熟を口唇で知る母の愛　柳帆
何もかも知らぬ氣でゐる母の胸　夏曉
苦勞したことほど母は思はれず　一杉
悲しさを母の寫眞へ告げて居り　百文
釘折の母の手紙へ手を合す　竹石
覺られた母へ氣まずく座るなり　夏曉
母一人濱に殘した海水着　山雨樓
席題　蚊帳　互　選
新世帶帳蚊帛りかけへ友が來る　柳帆
蚊帳の中角力を取つて叱られる　一間
子の書寢母枕かやそつとかけ　正風
蚊帳吊つて下宿いよ〳〵ぜまくなり　壽郎
轉宅日蚊帳の吊手の打處　百文
妹が蚤をはなつ蚊帳の中　寛靜

畔柳社例會（第十回）

五月十七日　於　大倶倶樂部

兼題　榮轉、駈落、口笛　山雨樓選
席題　煙突、宣傳　苦樂公選
同　名刺　某人　選
榮轉へ訓示が少し長くなり　苦樂公
榮轉へ近所の耳の早いこと　伊八
床の間を脊に榮轉もてゝゐる　某人
見る影もなく駈落の戻つて來　杏林
駈落の縮かんでゐる駐在所　銀牡丹
駈落を別々渡す警察署　九天
駈落のまだ〳〵死れぬ財布也　某人
(人)駈落の宿で飲んでるアスピリン　苦樂公
(地)駈落へこの溫泉の名高すぎ　九天
(天)駈落と決めて女中等寢しつまり　某人
口笛のリズムに乘つてアスファルト　喜山

(人)口笛で人分けて行く出前持　伊八
(地)三合目口笛少し弱つて來　苦樂公
(天)口笛を吹いてる方が獨り者　某人
爪剪つて居れば子供が背に來る　銀牡丹
息災な母おや指の爪が伸び　苦樂公
(人)背掻いて不素の爪を叱られる　杏林
(地)新妻の揃へて見せる爪の色　伊八
(天)爪を剪りながら遠出をつてゐ　某人
ストライキ煙突の方へ拳あげ　同
(佳)煙突の方へゴム靴朝を出る　同
(同)失業へ煙突ズラリ並んでる　喜山
(軸)煙突は支海を越ゆ意氣を見せ　苦樂公
(同)煙突の煙アンテナへひっかゝり　同
格安のビラへ夫婦の足が向き　栗花
宣傳で見れば萬病治つてゐ　某人
(佳)宣傳の女優を乘せて狹い街　銀牡丹
(同)宣傳の通り女中は覺へてゐ　某人
(同)出ぬ先に評判がある新雜誌　同
(軸)東西屋いゝ八木節で酒を賣り　苦樂公
(人)花名刺財布の底に殘つてる　喜山
(地)くり〳〵と名刺々卷い話題替へ　銀牡丹
(天)名刺受け八百屋案外いゝ名前　苦樂公
(軸)名刺一枚落ちて色街しんと更け　某人
(軸)紹介の名刺くらしに困つてゐ

川柳雜誌八東支部

祝賀の集ひ（島根）

五月十六日夜、日野理髮館階上の疊の香も新らしき室で鹿之助事　日野好夫君の新婚を壽く句會を開いた。　廣江天痴人報

兼題　祝　日野鹿之介選

祝日の朝をうらゝに霧晴れる　青波

祝電の誤字明らかに讀み直し　天痴人
祝宴に恩師ゆつくり酔つてくれ　檳榔
不敏なる俺を祝賀か泣けてくる　青波
兼題　伸　廣江天痴人選
紫外線ムんか知らずに伸びてゐる　青波
伸びきつた麥の生氣か嬉しいよ　六郎
席題　圓　滿　六郎、檳榔共選
酒にして事圓滿にけりがつき　亂笑
圓滿に校長先生割つて入り　檳榔
圓滿　家庭の延長、野良の晝　六郎
圓滿へ悪友誘ふ隙がなし　天痴人
圓滿な宵を曇つて物足らず　青波
席題　都　會　青波　遊星共選
ねぢがゆるんだ都會のの眞晝間だ　檳榔
都會からゆがんだ顔で戻つて來　天痴人
農民の呪詛がまたゝく都會の灯　同

川柳雜誌社

八東支部偶會

五月二十七日夜　於亂笑居
席題　湯上り　檳榔選
茶　六郎選
撒水　天痴人選
湯上りの大きな欠伸も農繁期　天痴人
庭下駄で湯上りらしい歩き振り　六郎
湯上りのマダムに窓の藤が見え　同
茶柱にせめて今日だけ任せませう　檳榔
摘いでほしい色に茶の芽が伸びよう　天痴人
撒き水へ神經衰弱氣を沈め　青波
水撒きの父の足首獲せてゐる　檳榔
昏れかゝる街を疲れて撒水車　六郎
撒き水の名殘りへ金魚涼しさう　天痴人

（その二）

五月二十八日夜　於松江市外古志原遊星居
席題　應　戰　亂笑、青波共選
血がたぎるプロレタリアの應戰だ　六郎
戰鬪機應戰させる音で來る　天痴人
席題　裸　體　遊　星　選
鍬を振る裸體に汗が解けて行く　青波
裸體畫へ理性のカケラ女の眼　六郎
（人）裸體畫の曲線となる木炭よ　同
（地）漁師の裸體生活力が彈けさう　天痴人
（天）大波と縺れる眞夏の裸の子　檳榔
席題　パラソル　檳榔選
パラソルを小風が誘ふ初夏の丘　青波
一ツ二ツパラソルが語る野の點景　亂笑
席題　野球（一般）　六郎選
終戰のベースラインへ陽がかげり　亂笑
野球部の主將らしい破れ服　遊星
センターはきり今日の風を知り　檳榔
青空を縫ふ白球の吸ふ魅力　同
（秀）一球へ一球へ人がもる陽がゐる　亂笑
（同）勝つてほしい負けてほしい補回戰　天痴人
（秀）野球戰社長混つて負けになり　遊星
（感吟）野球です畑に鍬が立つてゐる　青波
席題　當　選　天痴人選
當選に病床の妻も起きてをり　遊星
當選の票沈默の夜となる　青波

畔柳社會報（第十一回）

六月八日　於大鐵倶樂部二號室
兼題　踏切。金魚　幸運　山雨樓　選
おばあさん暇な踏切走つてる　杏林
コスモスの下で踏切何か焚き　某人
家出して踏切までの遠さなり　九天
背伸びしておいて踏切番歸り　某人
踏切のあちら昔の戀仇　同
父親の理屈に金魚掬はれず　苦樂公
新柄の浴衣金魚へすつと立ち　某人
金魚鉢一つへ長屋涼んでゐ　九天
繃帶を卷いた一人が生き殘り　明坊
運といふものを信じてやつと寢る　某人
幸運のスタート切りし頃もあり　二郎
席題　留守番　苦樂公選
留守番の下女に八百屋の暇が要り　杏林
留守番の娘ぴつしやり閉めて縫ひ　某人
たまさかの留守居にフツと持つ箒　苦樂公
席題　女　給　互　選
失業に女給入用と貼つてあり　村夫子
姉さんの樣な女給とうまが合ひ　喜山
二人連れ女給の居ない店で食ひ　同
女給の手また來るといふ手を握り　苦樂公
理想などフヽンと云つて女給老け　某人
噂
馘首の噂氣にする年齢でゐる　明坊
なまめいた噂で仲居炭をつぎ　某人

ひかり集（その十七）

水谷鮎美報

鏡
鏡の底に風ありぼたん刷毛の戀　卜居
鏡をふせば春の感傷がうづくよ　同
捨てられた鏡へ雲のゆきゝする　同

ひとりおもひの鏡のあおさ　鮎美
中年の鏡にみいる吾となり　同
陽のなかに曲る鏡もあるぞかし　同

此花句會（大阪）

五月二十四日　於藤田特許事務所　藤田紫石報

兼題　煙　翠夢選

煙輪にして戀が出來ない　比古
煙つてる山を若さで登り切り　あや美
煙草の輪追ふて小猿が摑むなり　即
煙ほそ〳〵五月雨を吸ふ　紫石
初夏の空煙と消へし友の靈　野洲
紫の煙が殘る社長室　素月
喰熱く禁郷の煙へふりかへる　琴人
雑念が煙の樣にもつれてる　正夫
煙ますぐにのびて野風なし　葉平

兼題　望み　琴人選

芦の間に望み無き釣竿一本　正夫
ひもじさがグッと望みを變へさせる　革郎
刑門を出て青空へ息を吸ひ　比古
望みはかなく今日も暮れゆく　文蝶
大望の小倉の服が破れてる　素月
湧くまゝに消ゆるがまゝに望あり　木兎
冷えたお茶となつてはかなし　即
切れし一縷の望みをいたわりてはり　葉平
望みの岡へ心廣げる　あや美
望み敢なく頼杖のしびれ　紫石

兼題　五月雨　琴人選

五月雨に窓邊の花の冴ゆる　正夫
五月雨の約束やつぱり來てくれず　あやみ
五月雨を吸つて疲れた靴の音　紫石
窓を打つ五月雨今日の一人ぼつち　文蝶
失業の眼に五月雨の重々し　革郎
五月雨に女の足の白かりき　葉平
五月雨に眼鏡のふちが曇るなり　素月
（軸）五月雨の窓へ旅愁を抱いて立つ　琴人

兼題　雑　吟選

上向けぬくびで持つてる都會人　素月
疊の汚れ物の數ではない暮し　文蝶
おちつけずリブトン紅茶を一人のみ　あや美
（佳）群衆の中をリ抜け出る娘は金魚だ　正夫
（同）ハッキリと言へば危ない首であり　革郎
（同）人燒く煙りと教へられちつとたる　即
（同）夕心くれるものゝ香　葉平

神戸ところ〴〵（第一回）

本社の句會で兼題「道頓堀」の催しあり、それに眞似て「神戸ところ〴〵」をはじめました。

昭和八年六月五日夜　喜多春秋報

元町　互選

元ブラは煎餅の匂ひかゞされる　吉左右
元町を島田が行くとのぞかれる　同
元町の鎧兜に立止まり　春秋
元町の不意に横から南京語　同
元町へ來て元町の氣で歩るき　明珠
元町の鈴蘭燈へ揃ふ足　幸捐
流星を見つけた元町の足　竹楓
ヨーヨーの子供元町横切つて　華水
濱づたひ湯崎七湯の名は高し　方眠
紀州綿みかんの花の中を行き　同
湯の町のエロ二階から首を出し　遊歩
新婚のことなど考へ湯につかり　同
小溝にも湯がながれゐる白良の濱　同
籐椅子へまともに海の風がくる　觀月
男女ぐるみ湯の街らしいなり　同
雨のなか連絡船へ波もよし　鮎美
指させば圓月島は霞むなり　同
宿の團扇に日附印を押してゐる　同

白濱湯崎　南紀遊覽　水谷鮎美報

睦會句報（神戸）

五月廿五日　西村明珠報

肌　清記互選

陽燒した肌の香ひの初秋の朝　惰々
肌寒むざむ妻逝きし秋の朝　高雄
荒れ肌今日も港は日が暮れる　同
ツルハシの肌へ眞夏の陽の光　明珠
三十の肌へ悲しい白粉だ　同
六月の女の肌にある丸味　同
肌あせて夫の愛の身に泌みる　彌之助

盛り場　清記互選

盛り場の戀へ夜明の白々し　彌之助
髮結つて來て盛り場も面白し　明珠
盛り場物たりなさの中を行く　惰々

痩せる　清記互選

痩せる程思ふて見るも若い時　高雄
痩せた顔ふと寫し見た秋の朝　惰々
見る度に痩せる鏡にまた立つてゐ　芳雪
痩せる程戀して見たし春の雨　彌之助
痩せたなと思ふ手首を握つて見　明珠

夏帽子　清記互選

カンカン帽二つかむつて秋になる　高雄
妻から帽子受けとり夏の朝　芳雪
夏帽子並んでビール立つて飲み　惰々
夏帽子白さのまゝで病んでゐる　彌之助
夏帽子ひけめも取らず歩るくなり　明珠

天痴人居偶會（島根）

五月三日　天痴人報

題　粽、自轉車、酒屋、麥

パラソルへ追付くペタルぐつと踏み　幸雄
笹粽が食へてうれしい野良休み　天痴人
麥稈帽を鉢卷にかへ鍬を振り　益之助
エプロンへ派手に麥酒が泡を吹き　勁一郎

つどい（第拾三回）

姫田夕鐘報

眞

うその世も夏は容赦なく迫る　水車
眞實に惚れましたんやと年増來る　夕鐘

光笑會

六月十四日　於カナメ喫茶店　永田里十九報

兼題　倶樂部　互選

キツチリと居つた倶樂部を笑はれる　白柳子
一夜あくれば倶樂部の靜かなり　里十九
カーテンへ倶樂部の影は動くなり　豆秋
探してる人がクラブを出た所　綠雨

席題　禿　互選

禿口が違つているよと笑つてゐ　里十九
女事務禿げてゐるのへ聞きにくる　白柳子
錢湯を出るに手拭を禿にのせ　綠雨

川柳風呂（その五）

水谷鮎美報

渡り鳥

渡り鳥酌婦は醉ふた眸で見あげ　晴夫
父逝きし軒へ今年も來た鳥よ　同
海越へてゆく渡り鳥陽に溶けり　鮎美
赤い花のなかに渡り鳥がゐる　同
湖の邊に卵を産みし渡り鳥　同

五月人形

硝子にうつる五月人形が夢を追ふ　卜居
父若く五月人形のおもしろし　鮎美
今年も五月人形を買ひ添へる　同
五月人形を飾る寢床の向きをかへ　遊歩

雜　吟

屋根の光を力すけてもどつて來た　石竹
鱗一枚手に顔　魚屋のしろすがた　同
空からしぶき麥の穗へ下りたひばり　同
羞しきお妓のいのち陽にさらけ　鮎美
でこぼこの疊にれば朝はやし　同

松商五人集（松江）

山根梟人報

貰ひ風呂父は剃刀さげてゆき　のぶを
失業に地下足袋重く感ぜられ　浮涙人
友情にあまへて輕く咳が出る　梟人
嘆願の對筒机においたきり　同
瞼の裏をホームシックに涙が這ひ　同
グループで笑窪の女もてゝゐる　紫柳
友情へ男をすてゝすがつてゐ　同
夏服へ巡査輕げな歩き振り　同

（父を歌ふ一句）

晩酌へ宵寢が癖になつた父　同

キング喫茶室偶會

ビール　互選

舊友の脫いでビールへ風をほめ　九文錢
濱仲仕ビールへ豆を皆んなあけ　同
來客のためにビールを殘しとき　禿山
生ビール賣るスタンドをさがす晝　同
十二本便所が近くなるビール　銀波
日曜の留守に賣つてるビール瓶　同
汐風にビールの泡を散らす也　葭乃
童貞へビールを少しつぎこぼし　同

暑中見舞の廣告を募る

川柳家の名簿と柳友交誼の爲是非一口御申込み下さい。

❖一口　金五拾錢

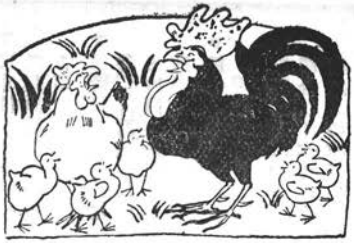
幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分の原稿はなるべく簡單に願ひます。

◇申込期限七月十二日迄【八月號に掲載】

大阪市住吉區平野西之町八三

川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番



編輯の窓

路郎生

▼本號の表紙畫は森田ひさし君眞夏のユーモアを捉えて餘すところなしである。

▼「句評陣」は孥人、艸樂、水車山雨樓、丹路の五君が思ひ〳〵の論陣である。

▼「武玉川初篇研究」秋農屋、東魚、省二三君のうまざる努力が本誌の好讀物たらしめてゐる。

▼「地下鐵」欄を廢したので「雜筆春秋」欄を新設した。新人の活躍を期待したい。

▼「近作柳樽」を一段組にして、句間も少しくゆつたり組むことにしたので非常に評判がいゝ。「川柳塔」も從來よりはウンとユツクリ組むことにした。そして「粒々集」を他頁へ移した。

▼七月は夏祭の大阪、それは私たちに體を思はし、章魚を思はすところに滑稽味を滿喫せしめる。あついを連發せしめるシーズンだ。川柳家諸賢の自愛を祈る。

▼山雨樓君が「自由律川柳を駁す」を書いた。これは町二君が三月號で「定型非定型」と題して自由律川柳を肯定したのに對しての駁論である。

▼笠原博士が「再び川柳の飜譯に就て」寄せられた。短いものではあるが斯うした方面の研究にはその人を得たと云へやう。

▼日本名所名物川柳をボツ〳〵發表することにした。柳畫の揮毫は前號の表紙畫を描いた大西長三郎君である。

▼大阪市會議員も落つくところへ落ついた形だ。我社からは贊助員の藤本卯之助君と同人の庄健一君とが立候補したが藤本君は不幸にも落選の憂目を見た東區から政友が二名立候補したゝめ二名とも落選した。大阪支部の統制がとれなかつたのが大きな原因だ。庄君は前回同樣南區から出馬して一時は危ぶしの觀があつたが、民政の辻阪氏が立候補して多數の票數を搔ッさらつたのが無產黨を有利に導いて雅號の示す如く「萬よし」で當選した。私は今回の市議戰に初陣藤本君の應援に主力をそゝいたので、選擧なるものについて敎へられるものが多かつた。勝敗は別として兩君に對する川柳家のこゝろからなる應援を兩君に代つてこゝに謹んで深謝する

▼六月十日加茂川句會の一週年で入洛した。仲源寺の會場が狹いほどの出席。幹事平岩司郎君の勞を思ふ。京都川柳家のこゝろよき應援を思ふ。

▼六月一日、春元紀太君が滿洲への旅行を大阪驛頭に送つた。翠夢君、あやみ君、葉平君等多數の見送りがあつた。滿洲ではみつる君柳路君等にあはれたそうだ、六月二十三日歸阪、廿五日夜、心交社小室で歡迎句會を開いた。

▼安川久流美君が西日本への旅中、森田森の家君に車中で會ひ寄せ書を寄せられた、大阪通過の際久流美君から電話をもらつたが、折悪しく不在歸途を待つたが立寄られなかつたことを思ふと同伴者があつて歸りを忙がれたものらしい。

▼西島○丸氏が病氣に藉口してきやりを去つた　献身的努力を惜しまれなかつた同氏を失つたことは「きやり」誌にとつては少からぬ打撃ではあらうが、そのために「きやり」同人が同氏に多く頼り過ぎてゐたことを自覺して熱と力を十分に發揮し得られたら反つて双方を生かす結果になり、同氏が「きやり」を去つたといふことが無意義でなくなるだらう。

▼不意に病むと云へば池田梨花女が十六日の夜に永眠した。九日の夜訪れて行つた時には病氣でもなんでもなく、微笑を以て迎えて、私のチョッキのボタンをつけてくれたりしてゐたんだがと思ふと心が暗くなるのを覺える

▼公立社の藤堂夫人が十四日に亡くなられたことを追憶記事を依頼されてはじめて知つた。でつぷり太つたキノ夫人は自分で自分のからだを持ち扱ひになやんでゐられたやうであつた。寡默貞淑な夫人であつたことを今更のやうに思はされる。

▼綠雨君は相變らず社のために東奔西奔してゐる。新計劃に對しても同君の努力に俟つことが多い。別稿社告の東京句會についても大車輪である。社内の奮起は云ふまでもないが全國川柳家の應援がのぞましい。

▼山雨樓、町二兩君も忙しい〳〵と云ひながらも奮闘を續けてゐる。

▼八月號は特輯號でもあるから素派らしいものを出したいと思ふ、

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に淸記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十卷第九號課題

七月五日締切

（各題十句以內）

▼牛　中澤濁水選

▼燈明　伊藤綠之助選

▼櫛　西田艸樂　日野華水共選

第十卷第十號課題

八月五日締切

（各題十句以內）

▼風　松盛琴人選

▼坑夫　松丘町二選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼諸代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも貰ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は爲新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

昭和八年六月廿五日印刷

昭和八年七月一日發行

第十卷第七號（毎月一回一日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所　川柳雜誌社

電話天下茶屋二五七九番

大阪市住吉區平野西之町八三番地

事務所　川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番

電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市內　各書店）

（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、寶文館（廣館）　石鎌

（京都）三宅（松山）弘文舍（石川縣）小松はかりや

川柳雜誌社關係の人々（いろは順）

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　赤井清司　淺田一　末弘嚴太郎　鳥山一歩　大島濤明　大谷五花村　岡田三面子　亀井花童子　川村花菱　川上三太郎　田村孝之介　谷脇素文　窪田銀波樓　長野吉高　安川久流美　前田雀郎　前田五健　柴谷柴舟　篠原春雨　藤里好古　中見光路　三好計加　福田鶴峰　森東魚

客員

伊藤彦造　蛭子省二

社友

尼絲之助　生田翠夢　石曾根民郎　石森静太　市塲沒食子　松下小柳子　増位汀柳　奥野禿山　熊谷久水　西村月山　西村明珠　江戸みつる　友淵貴山　大西八歩　阿形一杉　櫻井圓角　岩崎柳路　福田山雨樓　松盛琴人　松丘町二　須崎豆秋　首藤竹楓　妹尾變人　平塚亂笑　日野華水　姫田夕鐘　關本雅幽　上野錦水　村松夢裡　中澤濁水　奈良井柳人　白井梅里　平井蒼太　朝田新水　阿部閑生　中島鐵洲　左馬喜多春　辻上錦石秋　立井登美坊　谷村稔　河合紫石　北山悟郎　太田朝陽　西田艸樂　吉田水車　高橋かほる　中西おさむ　宮岡白峰　三輪夏曉　中野柳陽

同人

庄萬よし　永田里十九　麻生路郎

編輯局（同人）

道頓堀支部（大阪市）幹事庄萬よし　九三會支部（大阪市）幹事北山悟郎　神戸支部（神戸市）幹事日野華水　函館支部（函館市）幹事亀井花童子　高知支部（高知市）幹事中澤濁水　梅田支部（大阪市）幹事永田里十九　盤ヶ池支部（大阪府）幹事石森静太　田邊支部（和歌山）幹事辻左馬　筑川支部（島根縣）幹事尼絲之助　豊橋支部（愛知縣）幹事白井梅里　加古川支部（兵庫縣）幹事宮田泰山　京都支部（京都市）幹事平岩司郎　鳥取支部（鳥取市）幹事中島鐵洲　堺支部（堺市）幹事八木夜美路　松山支部（松山市）幹事河合紫石　守口支部（大阪府）幹事朝田新水　御旅支部（大阪市）幹事生田翠夢　高岡支部（富山縣）幹事越田久水　天王寺支部（大阪市）幹事福田鶴峰　鶴町支部（大阪市）幹事妹尾變人　小松支部（石川縣）幹事上野錦水　御池橋支部（大阪市）幹事村松夢裡　松江支部（松江市）幹事奈良井柳人　塗青支部（大阪）幹事熊谷紅　西條支部（愛媛縣）幹事荒井英賀夫　光繿會（大阪）幹事竹内機見女　萩ノ茶屋支部（大阪）幹事奥野禿山　北濱支部（大阪）幹事谷村稔　今里支部（大阪）幹事吉田水車　奉天支部（奉天）幹事江戸みつる　八東支部（島根）幹事平塚亂笑　野上支部（和歌山）幹事野添修一

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和八年六月廿五日印刷納本　昭和八年七月一日發行

川柳雜誌（第一一四號）

定價金三拾錢

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髄腦

伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精

輝く美髪

伊豆椿香油本舗

今直に御愛用下さい

全國有名化粧品藥店にあり